

授業科目名 <英訳>	証券市場の一般均衡分析 A General Equilibrium Analysis on Asset Markets A				担当者所属・ 職名・氏名	経済研究所 教授 原 千秋					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
この科目の目的は、一般均衡論的に基づく証券市場分析の手法を紹介することにある。投資家の効用関数（リスク回避度、主観的時間割引率、確率的信念など）を明示的に取り上げ、効用最大化行動の帰結として最適ポートフォリオや均衡証券価格を説明することを分析の主眼とする。具体的な内容は、受講生と相談の上決める。											
【到達目標】											
経済学の証券市場へのアプローチの考え方と分析の手法を習得し、実物セクターと金融セクターを統合するモデルを解析することができるようになるのが、本科目の目標である。											
【授業計画と内容】											
受講生との相談の上、以下のリストにある課題のいくつかを授業で教える予定である。											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 問題の所在 2. 確率過程の基礎 3. 連続時間ファイナンスモデルの紹介 4. 裁定取引の非存在条件と状態価格 5. 完備市場 6. Arrow-Debreu均衡の存在と効率性 7. 代表的消費者の構築 8. リスク回避度の異質性の帰結 9. 主観的時間割引率の異質性の帰結 10. 確率的信念の異質性の帰結 											
【履修要件】											
「上級ミクロ経済学」・「経済学のための数学」・「上級統計学」は履修済みのこと。これらの講義の内容は既知としてこの講義は進められる。「ファイナンス工学」など、ファイナンスに関する講義が履修済みであることも望ましい。基本的には修士課程2年生が対象である。											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
持ち込み一切不可の、数学的な問題より成る期末試験のみに基づく。											
なお、本学修士課程在学者で出席を希望するものは、必ず履修登録すること。単なる聴講は認めない。											
【教科書】											
Stephen LeRoy and Jan Werner 『Principles of Financial Economics, Second Edition』 (Cambridge University Press) ISBN:978-1107673021 Darrell Duffie 『Dynamic Asset Pricing Theory, 3rd ed』 (Princeton University Press) ISBN:978-0691090221											
----- 証券市場の一般均衡分析 A(2)へ続く ↓ ↓ ↓											

証券市場の一般均衡分析 A (2)

[参考書等]

(参考書)

Yvan Lengwiler 『Microfoundations of Financial Economics: An Introduction to General Equilibrium Asset Pricing』 (Princeton University Press) ISBN:978-0691126319

Christian Gollier 『The Economics of Risk and Time』 (MIT Press) ISBN:978-0262572248

Ionnis Karatzas and Steven E. Shreve 『Methods of Mathematical Finance』 (Springer Verlag) ISBN:978-1441928528

[授業外学習 (予習・復習) 等]

授業では省いた証明の細部を、復習の中で与えること。

(その他 (オフィスアワー等))

オフィスアワーは特段には設けないが、面談希望者はあらかじめメールで連絡すること。電話は使わないこと。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	実証ミクロ経済分析 Empirical Microeconomics				担当者所属・ 職名・氏名	経済研究所 教授 照山 博司					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
家計データや企業データ等のミクロ経済データを用いた分析に必要な基礎知識の習得を目的とする。前半はMiranda and Fackler(2002)を利用して、動的計画法の数値解法を、後半は、Adams et al.(2015)によって、最尤法、GMM、logitやprobitなどの離散選択モデルの推定方法を、Matlabによるプログラミングを通じて習得することを目指す。											
[到達目標]											
ミクロ経済データを用いた実証分析をテーマに、MatlabやStata等のソフトウェアを活用して、論文を作成するために必要な知識の習得を目指す。											
[授業計画と内容]											
前半はMiranda and Fackler(2002)の第7章から9章に基づいて、動的計画法の数値解法を、Matlabコード作成や練習問題を通じて解説する。後半は、Adams et al.(2015)の第3章と第4章を中心に、ミクロ実証分析でよく用いられる基本的な計量経済学手法について、Matlabによる解法を通じて学ぶ。講義の概要は以下の通り。 1～3回 数値積分と関数近似 4～6回 離散時間、離散状態変数の動的計画法の数値解法 7～9回 離散時間、連続状態変数の動的計画法の数値解法 10～12回 最尤法、GMM 13～15回 離散選択モデル											
[履修要件]											
「数値計算による経済分析」を履修済であることが望ましい。MatlabをPCで実行できる環境にあること。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
宿題として指定する内容のレポート、プログラム作成、練習問題解答とそれに基づく授業での報告。											
[教科書]											
Mario J. Miranda and Paul L. Fackler 『Applied Computational Economics and Finance』 (MIT Press) ISBN:9780262134200 Abi Adams, Damian Clarke, and Simon Quinn 『Microeconometrics and Matlab: an introduction』 (Oxford University Press) ISBN:9780198754503											
----- 実証ミクロ経済分析 (2)へ続く ↓ ↓ ↓											

実証ミクロ経済分析 (2)

[参考書等]

(参考書)

授業中に紹介する

[授業外学習 (予習・復習) 等]

宿題として指定する内容のレポート、プログラム作成、練習問題解答等の提出は、電子メールによって授業前日までに行うこととする。

(その他 (オフィスアワー等))

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	一般均衡理論 General Equilibrium Theory		担当者所属・ 職名・氏名	経済研究所 教授 梶井 厚志							
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火5,金5 隔週講義	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
上級ミクロ経済学を引き継ぎ、大学院レベルの一般均衡理論を講義する。一般均衡理論の数理的基礎、成り立ち、経済厚生、均衡の存在とその性質などを体系的に学ぶ。											
[到達目標]											
一般均衡理論の学習により、経済学的考え方の根幹にある市場機能の役割、およびその限界を体系的に学ぶことができる。抽象的な一般均衡モデルがもつ基本性質の理解にとどまらず、さまざまな経済分析が一般均衡理論の抽象的モデルに帰着されることを学ぶことを通して、それらの意義と相互関係が統一的に理解できる。											
[授業計画と内容]											
以下のトピックを、この順番で解説する。各トピックにつき、2回程度の講義をあてる（14回）											
<ol style="list-style-type: none"> 1.一般均衡モデルの基本的な例と一般均衡分析の意義 2.一般市場均衡解の定義と基本性質 3.厚生経済学の基本定理 4.均衡の存在と一意性 5.コアとその極限定理 6.不確実性 7.動学的一般均衡モデル これに加えてフィードバックおよび試験を行う。											
[履修要件]											
上級ミクロ経済学および経済学のための数学（またはそれに準じる科目）を受講済みであること											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
原則として期末試験の成績をもちいて成績評価をおこなう。理解を深めるために、各トピックについて宿題をだすが、提出された宿題の成績も若干加味する。											
[教科書]											
講義ノートを配布する。											
[参考書等]											
(参考書) 授業中に紹介する											
----- 一般均衡理論(2)へ続く ↓ ↓ ↓ -----											

一般均衡理論(2)

(関連URL)

http://www.1234.kier.kyoto-u.ac.jp/general_equilibrium2017.html(講義ノートなど、講義に関する情報が閲覧可能)

[授業外学習 (予習・復習) 等]

予習：授業ノートの対応箇所を読み、問題意識を共有しておくこと

復習： 授業ノート中に記載されている練習問題を解き、さらには宿題の提出をすること。

授業外学習は、復習を中心とする。

(その他 (オフィスアワー等))

学習効率を上げるため、授業は週2回行う。

例年11月の学園祭の時期は、学生とおぼしき集団による各種反学術的活動により経済研究所付近で発生する騒音のために、授業準備が非常に困難になる。それゆえ、授業はそれまで集中して行い、学園祭の期間周辺には行わない。

具体的な日程は、第一回の講義（10月3日）にて説明する。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	動学ゲーム理論 Dynamic Game Theory	担当者所属・ 職名・氏名	経済研究所 教授 関口 格
---------------	--------------------------------	-----------------	---------------

配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火4	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

[授業の概要・目的]

繰り返しゲームの理論について、大学院科目「上級ミクロ経済学」「ゲーム理論」の延長線上にある基礎的な部分から専門家のみが習熟する先端の手法に至るまで、幅広いトピックを講義形式で学ぶ。また、担当教員自身が研究者としていくばくかの貢献をしてきた不完全観測問題を講義の柱の一つとし、著者目線の解説をすることで研究の舞台裏をも垣間見せる。

[到達目標]

講義の初級・中級部分からは、1回逸脱原理や動的計画法アプローチなどの基本的な手法の理解が進み、フォーク定理に代表される定番的な結果も正確に理解できるようになる。これらの学習により、ミクロ経済学・ゲーム理論全般の理解が強化される。また講義の上級部分からは、この分野の研究の先端を体感することができ、学習の頑張り次第ではこの分野で論文が書ける段階にまで到達できる。

[授業計画と内容]

長期的関係のモデルとしての繰り返しゲームの理論について、主に情報構造と効率性（フォーク定理）との関係を中心に、担当教員の能力の許す限り深く掘り下げる。以下のリストの順番通りに講義をするが、参加者の興味・レベルを勘案しながらスケジュールを調整したいので、1回毎の内容を固定してそれに縛られるなんてことはしない。

1. 完全観測モデル

- ・1回逸脱原理
- ・フォーク定理(Fudenberg and Maskin (1986, Econometrica), Abreu, Dutta, and Smith (1994, Econometrica))

- ・ペナルコード(Abreu (1988, Econometrica), Abreu (1986, JET))

- ・応用：クールノー寡占

2. 不完全公的観測モデル

- ・APS法(Abreu, Pearce, and Stacchetti (1990, Econometrica))

- ・FL法とFLT法(Fudenberg and Levine (1994, JET), Fudenberg, Levine, and Takahashi (2007, GEB))

- ・FLMフォーク定理(Fudenberg, Levine, and Maskin (1994, Econometrica))

- ・AMP公式(Abreu, Milgrom, and Pearce (1991, Econometrica))

- ・私的戦略均衡(Kandori and Obara (2006, Econometrica), Mailath, Matthews, and Sekiguchi (2002))

- ・応用：チーム生産

3. 不完全私的観測モデル

- ・初期の構築的結果(Sekiguchi (1997, JET), Bhaskar and Obara (2002, JET))

- ・信念不問アプローチ(Piccione (2002, JET), Ely and Valimaki (2002, JET), Ely, Horner, and Olszewski (2005, Econometrica))

- ・応用：多市場接触問題

 動学ゲーム理論(2)へ続く ↓ ↓ ↓

動学ゲーム理論(2)

[履修要件]

「上級ミクロ経済学」を履修済みであるか、それと同等の学力があることを前提する。また、ゲーム理論に関する大学院科目も、履修経験があることが望ましい。

[成績評価の方法・観点及び達成度]

授業内容に関する問題集を途中で配布するので、単位を希望する学生は締切日（最後の講義の1週間後くらいを予定）までに提出すること。成績は、その出来栄による。

[教科書]

使用しない

[参考書等]

(参考書)

G. Mailath and L. Samuelson 『Repeated Games and Reputations』 (Oxford University Press)
質の高い教科書であり、並行して読み進めることができれば素晴らしいが、全くもって必須ではない。また、記法や思想が講義と完全に一致しているわけではないので、講義中の疑問の解決手段として使うのは勧めない。

[授業外学習（予習・復習）等]

担当教員の現在進行形の研究について触れる場合を除き、扱う話題にはすべて原論文がある。それらを並行して読み進めることができれば素晴らしいが、全くもって必須ではない。これらの論文は繰り返しゲームの理論の黎明期・発展期のものを含み、不幸にして記法や分析手法の規格化がなされていない。よって、講義内容の復習・確認のためにこれら論文に当たるのは、却って混乱するので勧めない。講義ノート・スライド（講義中に適宜配布）は規格化をきっちり行っているので、こちらを地道に読む方が予習復習には有益である。

(その他（オフィスアワー等）)

講義の言語は日本語だが、英語での質問は講義中を含め常時受け付けるし、英語で回答する。オフィスアワーなどを利用して、積極的に質問するのを歓迎する。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	ゲーム理論 Game Theory	担当者所属・ 職名・氏名	経済研究所 教授 関口 格
---------------	----------------------	-----------------	---------------

配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火4	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

[授業の概要・目的]
 大学院科目「上級ミクロ経済学」の内容を受けて、中級のゲーム理論について、大学院生として最低限知っておいた方がよいことを解説する。また、ミクロ経済学・ゲーム理論およびその応用分野で論文を書くときに知っておいた方がよい上級のトピックについても、可能な限り触れる。

[到達目標]
 ゲーム理論で分析できる経済学の問題は多岐にわたるが、それらのゲーム理論的な定式化に習熟し、様々な均衡概念について正確な理解を得る。また、基本的な定理・命題については、その証明のポイントを理解する。

[授業計画と内容]
 以下のトピックについて解説する。各トピックについて2回程度の講義をする予定である。受講者の理解度を推し量りながら解説を適宜増減したいので、一回ごとの内容を固定してそれに縛られるようなことはしない。またそのような進め方であるから、一部の内容を省くことがある。

- ・ 正規形ゲーム：強支配と繰り返し強支配、ナッシュ均衡、ミニマックス定理、相関均衡
- ・ 簡単な展開形ゲーム：2段階完全情報ゲーム、部分ゲーム完全均衡、後方帰納法
- ・ 一般的な展開形ゲーム：展開形ゲーム表現、解概念、正規形ゲーム表現との関係
- ・ 繰り返しゲーム：無限回繰り返しゲームにおける協調可能命題とフォーク定理、有限回繰り返しゲームにおける協調不可能性命題・可能性命題
- ・ 不完備情報ゲーム（静学）：ベイジアン均衡、顕示原理
- ・ 不完備情報ゲーム（動学）：逐次均衡、完全ベイズ均衡

なお時間が許せば、協力ゲーム理論の基礎的トピック（コア、シャプレー値、ナッシュ交渉解など）にも触れる。

[履修要件]
 特に履修要件はないが、大学院科目「上級ミクロ経済学」「経済学のための数学」を履修済みであるか、それと同等の能力に達していることを前提にして、講義は進んでいく。

[成績評価の方法・観点及び達成度]
 期末試験（筆記試験）の成績（80%）と平常点（20%）で成績評価する。平常点は、合計4～5回課す宿題の評価による。出席は一切カウントしない。

ゲーム理論(2)

[教科書]

初回以降適宜配布する講義ノートによる。ただし、協力ゲーム理論を扱うと決めた場合は、以下も用いる。
岡田章『ゲーム理論新版』、有斐閣、2011年

[参考書等]

(参考書)

初回以降、適宜紹介する。

[授業外学習(予習・復習)等]

ゲーム理論を使いこなせるようになるには、様々な定義を正確に理解しなければならない。講義中は色々な概念・用語が定義され使用されるが、全て講義ノートに正確に書いてあるので、予習・復習のどちらでもよいからしっかり頭に入れよう。

(その他(オフィスアワー等))

スケジュールの詳細等については、初回の講義のときにアナウンスする。期末試験の実施要領は、12月中旬ごろにアナウンスする。

講義の言語は日本語だが、英語での質問は講義中を含め常時受け付けるし、英語で回答する。オフィスアワーなどを利用して、積極的に質問するのを歓迎する。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	情報とインセンティブ Information and Incentive				担当者所属・ 職名・氏名	経済研究所 助教 陳 珈恵					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水3	授業 形態		使用 言語	英語
[授業の概要・目的]											
The course will focus on several topics of dynamic games with incomplete information. We will review literature on experimentation, bargaining with asymmetric information, and strategic information transmission in dynamic environments. In addition to conventional lectures delivered by the lecturer, students are required to present a paper related to one of the course topics in English.											
[到達目標]											
The goal of this course is to become familiar with research advances and techniques in several important research topics in dynamic games with incomplete information and to help students develop research ideas.											
[授業計画と内容]											
The reading list will be distributed in class.											
1. Experimentation (6 weeks)											
Bergemann, D. and Hege, U., (2005), The Financing of Innovation: Learning and Stopping, RAND Journal of Economics, 36, 719-752.											
Bergemann, D. and Valimaki, J., (2000), Experimentation in Markets, Review of Economic Studies, 67(2), 213-234.											
Bolton, P. and Harris, C., (1999), Strategic Experimentation, Econometrica, 67, 349-374.											
Bonatti, A. and Horner, J., (2011), Collaborating, American Economic Review, 101, 632-63.											
Gerardi, D. and Maestri, L., (2012), A Principal-Agent Model of Sequential Testing, Theoretical Economics, 7, 425-463.											
Guo, Y., (2014), Dynamic Delegation of Experimentation, mimeo.											
Halac, M., Kartik, N., and Liu, Qingmin, (2013), Optimal Contracts for Experimentation, mimeo.											
Horner, J. and Samuelson, L., (2013), Incentives for Experimenting Agents, RAND Journal of Economics, 44, 632-663.											
Keller G., Rady, S. and Cripps, M., (2005), Strategic Experimentation with Exponential Bandits, Econometrica, 73, 39-68.											
Klein, N.A. and Rady, S., (2011), Negatively Correlated Bandits, Review of Economic Studies, 78, 693-732.											
Strulovici, B., (2010), Learning While Voting: Determinants of Collective Experimentation, Econometrica, 78, 933-971.											
2. Bargaining with asymmetric information (3 weeks)											
Abreu, D. and Gul, F., (2000), Bargaining and Reputation, Econometrica, 68 (1), 85-117.											
Abreu, D., and Pearce, D. (2007), Bargaining, Reputation, and Equilibrium Selection in Repeated Games with Contracts, Econometrica, 75, 653-710.											
Feinberg, Y. and Skrzypacz, A., (2005), Uncertainty about Uncertainty and Delay in Bargaining, Econometrica, 73(1), 69-91.											
Fuchs, W. and Skrzypacz, A., (2010), Bargaining with arrival of new Traders, American Economic Review, 100(3), 802--836.											
Yildiz, M., (2004), Waiting to persuade, Quarterly Journal of Economics, 119 (1), 223-248.											
3. Dynamic strategic information transmission (6 weeks)											
Acharya, V., DeMarzo, P., and Kremer, I., (2011), Endogenous Information Flows and the Clustering of											
----- 情報とインセンティブ(2)へ続く ↓ ↓ ↓											

情報とインセンティブ(2)

Announcements , American Economic Review, 101, 2955-2979.

Ely, J., and Valimaki, J., (2003), Bad Reputation, 118(3), 785-814.

Guttman, I., Kremer, I., and Skrzypacz, A., (2014), Not Only What but also When - A Theory of Dynamic Voluntary Disclosure, American Economic Review 104(8), 2400-2420.

Krishna, V., and Morgan, J., (2004), The Art of Conversation: Eliciting Information from Experts through Multi-stage Communication, Journal of Economic Theory, 117, 147#8211179.

Horner, J. and Skrzypacz, A., Selling Information, Journal of Political Economy, forthcoming.

Morris, S., (2001), Political Correctness, Journal of Political Economy, 109, 231-265.

Ottaviani, M., and Sorensen, P., (2001), Information Aggregation in Debate: Who Should Speak First? Journal of Public Economics, 81(3), 393-421.

Ottaviani, M., and Sorensen, P., (2006), Reputational Cheap Talk, RAND Journal of Economics, 37(1) 155-175.

[履修要件]

Prior knowledge of game theory is required.

[成績評価の方法・観点及び達成度]

Grading will be based on the presentation and active participation in discussion of presentations.

[教科書]

使用しない

[参考書等]

(参考書)

None

[授業外学習 (予習・復習) 等]

(その他 (オフィスアワー等))

Office hours are by appointments.

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	契約理論 Contract Theory		担当者所属・ 職名・氏名	経済研究所 助教 陳 珈恵							
配当年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水3	授業形態		使用言語	英語
[授業の概要・目的]											
The course will focus on several main subjects in contract theory. It gives an introduction to choice under uncertainty, moral hazard, adverse selection (signaling and screening), and mechanism design.											
[到達目標]											
The goal of this course is to introduce theories behind the optimal design of contracts in environments with asymmetric information and show applications of these optimal contracts in reality. By the end of this course, when confronting a contracting problem, students should be able to characterize the key properties and analyze the problem using the knowledge acquired in this course.											
[授業計画と内容]											
<ol style="list-style-type: none"> 1. Choice under uncertainty (2 weeks) 2. Moral hazard (3 weeks) <ul style="list-style-type: none"> Moral hazard Linear contracts Moral hazard with multiple tasks 3. Adverse selection: signaling (1 weeks) <ul style="list-style-type: none"> Spence's education model Market Breakdown 4. Adverse selection: screening (3 weeks) <ul style="list-style-type: none"> First-best and second-best outcomes Applications 5. Other topics (4 weeks) <ul style="list-style-type: none"> Multilateral asymmetric information Auctions Moral hazard in teams Relative performance evaluation Tournaments 											
[履修要件]											
A basic understanding of game theory is required.											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
Grading will be based on a final (60%) and 4 problem sets (40%).											
----- 契約理論(2)へ続く↓↓↓ -----											

契約理論(2)

[教科書]

Contract Theory 『Bolton and Dewatripont (2005)』 (MIT Press)

[参考書等]

(参考書)

Microeconomic Theory 『MasColel, Whinston, and Green (1995)』 (Oxford University Press)

Microeconomic Analysis 『Varian (1992)』 (W.W. Norton Company)

[授業外学習 (予習・復習) 等]

(その他 (オフィスアワー等))

Office hours are by appointments.

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	情報集約・コミュニケーションとゲーム理論 Information Aggregation and Communication in Game Theory	担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 講師 千葉 早織
---------------	--	-----------------	-----------------

配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木2	授業 形態		使用 言語	日本語及び英語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	--	----------	---------

[授業の概要・目的]

This class is open to English speakers.

本講義は、情報集約やコミュニケーションに関わる諸問題について、ミクロ経済学ゲーム理論を用いて考察する。まずは、ゲーム理論の基礎知識について学習する。次に、関連する学術論文を読解し、市場や組織におけるトピック（例えば、利益相反と情報集約、組織内での権限の配分）について議論する。

This course will focus on game theory and its applications. It will consist of two parts. The first part will cover the basic concepts in game theory (e.g., Nash Equilibrium, Subgame-Perfect Nash Equilibrium, and Perfect Bayesian Equilibrium) as well as famous games (e.g., prisoner's dilemma, oligopoly models, and signaling games). The second part will cover topics related to information aggregation and communications in the market and organizations (e.g., conflicts of interest and information aggregation, allocation of authority, and auctions). We will also read relevant academic papers.

[到達目標]

本講義で触れるトピック、議論や分析、それらの背景となる理論（ミクロ経済学ゲーム理論）について理解すること。応用ゲーム理論の学術論文を読解し、また、それらの論文を批判的に議論できるようになること。

By the end of this course, students are expected to understand the basic game theory and acquire analytical tools in the field. They are also expected to read and comprehend research papers on applied game theory and critically argue them.

[授業計画と内容]

- I. SCHEDULE (Plan)
 Weeks 1-14: Lectures and Presentations
 Week 15: Exam and Report
 Week 16: Feedback
- II. COURSE TOPICS (Plan)
1. Introduction to Game Theory (Weeks 1-7)
 - * Static Games of Complete Information
 - * Dynamic Games of Complete Information
 - * Static Games of Incomplete Information
 - * Dynamic Games of Incomplete Information
 2. Information Aggregation and Communication (Weeks 8-14)

Topics may include:

 - * Information and Authority in Organizations (e.g., Delegation)
 - * Information and Networks
 - * Information and Social Learning (e.g., Information Cascades)
 - * Information and Strategic Communication (e.g., Cheap Talk)
 - * Information Design (e.g., Disclosure & Persuasion)
 - * Information in Committees and Elections

情報集約・コミュニケーションとゲーム理論(2)

[履修要件]

修士レベルのミクロ経済学と基本的な線形代数学と微分積分学の知識を保有していることが望ましい。加えて、積極的に講義に参加することが期待される。

The knowledge of graduate level Microeconomics, the basic linear algebra, and the basic calculus is desirable. Also, active participation in class is expected.

[成績評価の方法・観点及び達成度]

Participation 20%

Presentation and Report 40%

Exam 40%

* Further details will be announced later.

[教科書]

Robert Gibbons 『Game Theory for Applied Economists』 (Princeton University Press) ISBN:978-0691003955 (1992)

[参考書等]

(参考書)

Drew Fudenberg, & Jean Tirole 『Game Theory』 (The MIT Press) ISBN:978-0262061414 (1991)

Martin J. Osborne, & Ariel Rubinstein 『A Course in Game Theory』 (The MIT Press) ISBN:978-0262650403 (1994)

[授業外学習 (予習・復習) 等]

Students are expected to read the text, review the notes, and solve exercises along the course.

(その他 (オフィスアワー等))

Monday & Wednesday 10:30-12:00 or by appointment. Office hours are subject to change based on announcement.

Email: chiba@econ.kyoto-u.ac.jp

My office: #705 in Faculty of Law & Faculty of Economics East Building (Building #5 on the campus map).

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	公共政策のためのマイクロ計量経済学 Microeconometrics for Public Policy	担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 特定准教授 北川 透
---------------	--	-----------------	-------------------

配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火5	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

[授業の概要・目的]

マイクロデータに基づく因果解析 (causal inference) のフレームワークを用い、マイクロ公共政策の評価 (program evaluation) や個々人に特化した政策 (individualized policy) を立案するための計量経済学的手法について、基礎的内容から、最先端の研究をふまえた発展的内容まで講義する。講義内容は統計理論的解析、推定方法を実際のデータに応用する方法、及び、応用実証研究例のバランスを重視する。

[到達目標]

- ・マイクロ政策評価に関する実証研究を行う上で有益な計量経済学の知識と技能を習得する。
- ・マイクロ計量経済学の理論研究をする上で重要となる数理統計的手法、及び最近の研究動向を学ぶ。

[授業計画と内容]

授業で扱う内容： 前半（トピック（1）－（7））はマイクロ政策評価に関する計量経済学を中心に扱い、後半（トピック（8）－（10））は政策立案のための統計的決定理論を中心に扱う。

- （1） 因果解析のフレームワーク、ランダム実験 (randomized controlled trial)、順列検定 (permutation test)。
- （2） 観測データを用いた因果解析 (observational studies)。交絡因子 (confounding factor) が観測可能 (selection on observables) なもとの政策評価。プロペンシティスコア法やマッチング推定、その他のノンパラメトリック推定手法。
- （3） 交絡因子が観測不可能 (selection on unobservables) なもとの因果解析。政策効果が個々人で異なる場合の操作変数法。
- （4） 分位点回帰 (quantile regression) と政策評価。操作変数分位点回帰 (instrumental variable quantile regression)。
- （5） 回帰不連続デザイン (regression discontinuity design) を用いた因果解析。
- （6） パネルデータを用いた政策評価。線形 DID (Difference-in-Differences)、非線形 DID。
- （7） 観測可能な個人属性が高次元の場合の因果解析手法。罰則付き回帰法 (penalized regression) の政策評価への応用。
- （8） 統計的決定理論 (statistical decision theory) の基礎と統計的政策配分 (statistical treatment choice) への応用。
- （9） 実証厚生最大化法 (empirical welfare maximization method) を用いた政策配分の推定。
- （10） 実証厚生最大化法の統計的性質。機械学習 (machine learning) アルゴリズムの実証厚生最大化法への応用。

[履修要件]

修士一年の計量経済学の知識を所与とします。

公共政策のためのミクロ計量経済学(2)

[成績評価の方法・観点及び達成度]

期末試験（100点）により評価する。

[教科書]

使用しない

[参考書等]

(参考書)

参考文献リストを講義中に配布します。

[授業外学習（予習・復習）等]

毎回講義後に復習のための演習問題（提出不要）を配布します。

(その他（オフィスアワー等）)

授業内容や研究内容についてミーティングを希望する場合は、事前に電子メールにて連絡を下さい。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	産業経済学 Industrial Economics	担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 教授 依田 高典
---------------	-------------------------------	-----------------	-----------------

配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水3	授業 形態		使用 言語	日本語及び英語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	--	----------	---------

[授業の概要・目的]

テーマ 行動経済学・フィールド社会実験から見た経済学への応用

この講義では、近年の応用経済学の発展を踏まえて、競争政策について検討していきます。

特に、フィールド社会実験に焦点を当て、エビデンスを重視した政策形成への応用について議論をしていきます。また、自分の興味に応じて、教科書の輪読・個別研究のプレゼンテーションを参加者をお願いします。

フィールド社会実験とは、実際の生活の中で、コントロールグループとトリートメントグループにランダムに分けて、関心のある実験を行い、その社会経済効果を測定します。

高度な予備知識は必要ありませんが、自分の行動経済学の知識のレベルに応じて、任意の行動経済学の入門書・専門書(邦訳可)を事前に読んでおくことを履修要件とします。

また、近年、政策効果の測定を市場や実生活において行うフィールド実験が注目を集め、ビジネスや政策の必須ツールとなっています。必要に応じて、フィールド実験の講義も行います。

高度な予備知識は必要ありませんが、自分の行動経済学の知識のレベルに応じて、任意の2冊の行動経済学の入門書・専門書(邦訳可)を事前に読んでおくことを履修要件とします。

また、近年、政策効果の測定を市場や実生活において行うフィールド実験が注目を集め、ビジネスや政策の必須ツールとなっています。必要に応じて、フィールド実験の講義も行います。

[到達目標]

自分が研究テーマにあわせて、フィールド実験を企画運営し、結果を行動経済学を使って吟味分析できるようになることです。

[授業計画と内容]

- 第1回から第5回 フィールド社会実験に関する教科書の輪読（基本）。
- 第6回から第10回 フィールド社会実験に関する上級教科書・論文の輪読（発展）。
- 第11回から第15回 自分が読んだ行動経済学の入門書・専門書をもとにして、自分の興味に応じて
どういった調査研究をしたいのか研究計画のプレゼンテーション。

参考までに、講師の行動経済学に関する学術論文は書下記のHPで記載されています。
<http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/~ida/3Kenkyuu/3Workingpaper/workingpaper.html>(履修要件)
 ミクロ経済学に関する基礎知識を有すること。

産業経済学(2)

[履修要件]

ミクロ経済学・計量経済学に関する基礎知識を有すること・または同時に学習することが望ましい。

[成績評価の方法・観点及び達成度]

基本的に、平常点を重視して評価します。
(講義中のプレゼンテーション、必要に応じてレポートの提出など)

[教科書]

授業中に指示する

[参考書等]

(参考書)

依田高典・田中誠・伊藤公一朗 『スマートグリッド・エコノミクス』 (有斐閣) (2017年5月発売だが事前に草稿を配付する)

[授業外学習 (予習・復習) 等]

発表割当時に予習が必要です。

(その他 (オフィスアワー等))

オフィスアワー 予約に応じて随時 (内線3477 オフィス新棟614号室)
オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	応用経済学 Applied Economics	担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 教授 依田 高典
---------------	----------------------------	-----------------	-----------------

配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水3	授業 形態		使用 言語	日本語及び英語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	--	----------	---------

[授業の概要・目的]

テーマ フィールド実験・自然実験を極める

この講義では、近年、経済学で非常に重要なツールとなっているフィールド実験、自然実験の基礎・発展・応用を勉強します。

フィールド実験はランダム化比較対照の手法を用いた社会実験のことで、セルフセレクションバイアスを排除した真の政策効果を同定する手法です。トリートメント効果（介入）の正しい効果を同定するために、集団をランダムにコントロールグループとトリートメントグループに振り分け、両グループのトリートメント前後の差の差をパネルデータ分析します。近年では、開発経済学の分野で、「貧乏人の経済学 - もういちど貧困問題を根っこから考える」（アビジット・V・バナジー、エスター・デュフロ）、「善意で貧困はなくせるのか? — 貧乏人の行動経済学」（ディーン・カーラン、ジェイコブ・アベル）の著作などで取り上げられています。

予算の規模や運営の困難さから、フィールド実験を日本やアメリカのような先進国で、エネルギーや医療のような重要な研究テーマで実施することは困難でした。我が依田研究室では、2010度から経済産業省との共同研究として、スマートグリッド（次世代電力システム）のフィールド実験の運営を行っています。そうしたノウハウも含めて、本講義では講義をしていきます。

今後はフィールド実験が、ラボ実験と並んで、経済学の必須ツールとなっていくことでしょう。あわせて、ミクロ計量経済学、行動経済学など、一緒に勉強すれば、注目度の高い学術論文を執筆できるかもしれません。興味のある方はご参加下さい。

前期に、行動経済学・（基本的）フィールド実験を勉強する「産業経済学」を開講していますので、そちらもあわせての履修をお勧めします。

[到達目標]

自分が研究テーマにあわせて、フィールド実験を企画運営し、結果を行動経済学を使って吟味分析できるようになることです。

[授業計画と内容]

第1週から第5週
 フィールド実験の基本的な知識を講義または輪読します。
 参考書として、下記の2冊を上げます。
 [1] Rachel Glennerster, Kudzai Takavarasha, Running Randomized Evaluations: A Practical Guide, Princeton Univ Pr (2013/11/4)
 [2] Alan S. Gerber, Donald P. Green, Field Experiments: Design, Analysis, and Interpretation, W W Norton & Co Inc (Np) (2012/5/29)

第6週から第10週
 自然実験の基本的な知識を講義または輪読します。
 参考書として、下記の1冊を上げます。
 [1] Dunning, Thad (2012). Natural Experiments in the Social Sciences: A Design-Based Approach.

応用経済学(2)

Cambridge University Press.

第11週から第15週

フィールド実験・自然実験の論文を輪読します。

例えば、次のような2論文を取り上げます。

[1] Ida, T., Ito, K., Tanaka, M. (2013) "Using Dynamic Electricity Pricing to Address Energy Crises: Evidence from Randomized Field Experiments," Mimeo, Stanford University.

[2] Ito, K. "Do Consumers Respond to Marginal or Average Price? Evidence from Nonlinear Electricity Pricing," American Economic Review, 104(2): 537-63, 2014.

[履修要件]

ミクロ経済学・計量経済学に関する基礎知識を有すること・または同時に学習することが望ましい。

[成績評価の方法・観点及び達成度]

基本的に、平常点を重視して評価します。

(講義中のプレゼンテーション、必要に応じてレポートの提出など)

[教科書]

授業中に指示する

[参考書等]

(参考書)

授業中に紹介する

[授業外学習(予習・復習)等]

発表割当時に予習が必要です

(その他(オフィスアワー等))

オフィスアワー 予約に応じて随時(内線3477 オフィス新棟614号室)

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	比較制度・組織分析 A (演習) Comparative Institution & Organization Analysis A (Seminar)	担当者所属・ 職名・氏名	国際高等教育院 准教授 菊谷 達弥
---------------	---	-----------------	-------------------

配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

[授業の概要・目的]

情報の不完全性のもとでの取引の枠組みを研究する「契約理論contract theory」、より広くはゲーム理論game theoryを理論的基礎としながら、「組織」を経済学的に分析する分野が「組織の経済学organizational economics」です。また、この組織の経済学とゲーム理論を用いて、「制度」を経済学的に分析する分野が「比較制度分析comparative institutional economics」です。本授業は、これら両方のアプローチを用いて、日本の企業システムの特性を研究することを目的とします。

対象とするトピックスは、人事制度と、部品取引に関するメーカー・サプライヤーシステムです。日本では、いずれについても長期継続的取引が中心となっており、契約も不完全です。そこで、取引が継続される理論的基礎を提供すると考えられる取引費用理論と繰り返しゲーム理論の文献、不完備契約の理論の文献を読みます。そして、人事制度と部品取引システムについて日本企業の実態とその特徴を分析した文献を読みます。

両制度ともこれまでの日本経済を支えた優れたシステムと考えられてきましたが、現在は、マクロ経済の不確実性の増大、グローバリズム・技術革新の進展から、変容を迫られている過渡期にあると思われ、その特長と限界を再検討することは重要なテーマであると考えます。

- [到達目標]**
- ・日本企業の人事制度と部品取引システムの特性を理解する。
 - ・組織と制度の問題に対して、ゲーム理論や契約理論などを用いて、理論的にアプローチできる。
 - ・これらの理論的な知識をもとに、現実の問題に対して実証的にアプローチできる。

[授業計画と内容]

上の「授業の概要・目的」で述べた分野の諸文献を、担当者が報告する形式で進めます（ミクロ経済学の中級の知識を必要とします）。下記の文献リストから選びますが、これらは例であり、場合によって文献の追加も入れ替えもあります。またこれらは日本語文献のみですが、必要に応じて英語文献も指示します。

- ・日本企業の特性 … 青木昌彦・奥野正寛『経済システムの比較制度分析』東洋経済新報社、1996年。ロナルド・ドーア『日本型資本主義と市場主義の衝突』東洋経済新報社、2001年。
- ・繰り返しゲームの理論 … 神取道宏『人はなぜ協調するのか—繰り返しゲーム理論入門』三菱経済研究所、2015年、『見間違えのある繰り返し囚人のジレンマ—私的不完全情報観測下の実験トーナメント』三菱経済研究所、2016年。
- ・不完備契約の理論 … 津曲正俊『契約と組織の理論—取引費用と取引関係のガバナンス』三菱経済研究所、2001年。
- ・取引費用理論 … ロナルド・H・コース『企業・市場・法』日本経済新聞社、1992年。
- ・日本企業の人事制度 … 濱口桂一郎『日本の雇用と労働法』日経文庫、2011年。
- ・日本企業の部品取引システム … 浅沼万里『日本の企業組織—革新的適応のメカニズム—長期取引関係の構造と機能』東洋経済新報社、1997年。

比較制度・組織分析 A (演習) (2)

[履修要件]

コア・コースのミクロ経済学と計量経済学をすでに受講したか、受講中であること。

[成績評価の方法・観点及び達成度]

出席・報告・議論への参加度

[教科書]

授業中に指示する

[参考書等]

(参考書)

授業中に紹介する

[授業外学習 (予習・復習) 等]

自分が担当する論文の報告準備をすること。

(その他 (オフィスアワー等))

オフィスアワーの時間は特に定めないので適宜予約をとること。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	比較制度・組織分析B (演習) Comparative Institution & Organization Analysis B (Seminar)	担当者所属・ 職名・氏名	国際高等教育院 准教授 菊谷 達弥
---------------	--	-----------------	-------------------

配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

[授業の概要・目的]

情報の不完全性のもとでの取引の枠組みを研究する「契約理論contract theory」、より広くはゲーム理論game theoryを理論的基礎としながら、「組織」を経済学的に分析する分野が「組織の経済学organizational economics」です。また、この組織の経済学とゲーム理論を用いて、「制度」を経済学的に分析する分野が「比較制度分析comparative institutional economics」です。本授業は、これら両方のアプローチを用いて、日本の企業システムの特性を研究することを目的とします。

対象とするトピックスは、人事制度と、部品取引に関するメーカー・サプライヤーシステムです。日本では、いずれについても長期継続的取引が中心となっており、契約も不完全です。そこで、取引が継続される理論的基礎を提供すると考えられる取引費用理論と繰り返しゲーム理論の文献、不完備契約の理論の文献を読みます。そして、人事制度と部品取引システムについて日本企業の実態とその特徴を分析した文献を読みます。

両制度ともこれまでの日本経済を支えた優れたシステムと考えられてきましたが、現在は、マクロ経済の不確実性の増大、グローバリズム・技術革新の進展から、変容を迫られている過渡期にあると思われ、その特長と限界を再検討することは重要なテーマであると考えます。

[到達目標]

- ・日本企業の人事制度と部品取引システムの特性を理解する。
- ・組織と制度の問題に対して、ゲーム理論や契約理論などを用いて、理論的にアプローチできる。
- ・これらの理論的な知識をもとに、現実の問題に対して実証的にアプローチできる。

[授業計画と内容]

上の「授業の概要・目的」で述べた分野の諸文献を、担当者が報告する形式で進めます（ミクロ経済学の中級の知識を必要とします）。下記の文献リストから選びますが、これらは例であり、場合によって文献の追加も入れ替えもあります。またこれらは日本語文献のみですが、必要に応じて英語文献も指示します。

- ・日本企業の特性 … 青木昌彦・奥野正寛『経済システムの比較制度分析』東洋経済新報社、1996年。ロナルド・ドーア『日本型資本主義と市場主義の衝突』東洋経済新報社、2001年。
- ・繰り返しゲームの理論 … 神取道宏『人はなぜ協調するのか—繰り返しゲーム理論入門』三菱経済研究所、2015年、『見間違えのある繰り返し囚人のジレンマ—私的不完全情報観測下の実験トーナメント』三菱経済研究所、2016年。
- ・不完備契約の理論 … 津曲正俊『契約と組織の理論—取引費用と取引関係のガバナンス』三菱経済研究所、2001年。
- ・取引費用理論 … ロナルド・H・コース『企業・市場・法』日本経済新聞社、1992年。
- ・日本企業の人事制度 … 濱口桂一郎『日本の雇用と労働法』日経文庫、2011年。
- ・日本企業の部品取引システム … 浅沼万里『日本の企業組織—革新的適応のメカニズム—長期取引関係の構造と機能』東洋経済新報社、1997年。

比較制度・組織分析B（演習）(2)

[履修要件]

コア・コースのミクロ経済学と計量経済学をすでに受講したか、受講中であること。

[成績評価の方法・観点及び達成度]

出席・報告・議論への参加度。

[教科書]

授業中に指示する

[参考書等]

(参考書)

授業中に紹介する

[授業外学習（予習・復習）等]

自分が担当する論文の報告準備をすること。

(その他（オフィスアワー等）)

オフィスアワーの時間は特に定めないので適宜予約をとること。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	ファイナンス工学 1 Financial Engineering 1				担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 教授 江上 雅彦					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月4	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
ファイナンス工学、確率モデルによる最適化問題の基礎となる「確率論」と「確率過程」を体系的に学習します。											
主として研究者を志望する人を対象にしており、数学的にテクニカルな内容を含みますので注意してください。											
[到達目標]											
確率論の基礎を確実に理解することを目標とします。											
[授業計画と内容]											
以下のような課題について、1課題あたり1～2週の授業をする予定です。											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 測度空間と可測関数 2. 積分 3. 確率測度、確率変数、分布関数 4. 期待値 5. 直積空間 6. 条件付期待値 7. 収束概念 8. 確率過程と情報系 9. 停止時刻(stopping times) 10. 離散時間のマルチンゲール 11. ブラウン運動 											
[履修要件]											
極限操作など、微分積分・解析の知識を有していること。 宿題など復習に十分な時間を費やすことができること。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
宿題 (50%)、期末試験 (50%)											
[教科書]											
E. Cinlar 『Probability and Stochastics』 (Springer)											
-----ファイナンス工学1(2)へ続く↓ ↓ ↓											

ファイナンス工学1(2)

[参考書等]

(参考書)
授業中に紹介する

[授業外学習(予習・復習)等]

復習は必須です。また次の授業ではどのようなことを履修するかについて把握しておいてください。

(その他(オフィスアワー等))

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	ファイナンス工学 2 Financial Engineering 2	担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 教授 江上 雅彦
---------------	---------------------------------------	-----------------	-----------------

配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	月4	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

[授業の概要・目的]

『ファイナンス工学1』で履修した離散時間における確率過程の理論を連続時間へ拡張します。これにより派生証券に関する価格付けの理論を数理的に処理することが可能となり、今後の研究の基礎固めとなります。方法としては教科書の第1章、第3章を詳細に学習し、体系的に知識・スキルを積み上げていきます。

主として研究者を志望する人を対象にしており、数学的にテクニカルな内容を含みますので注意してください。

[到達目標]

連続時間のマルチンゲール、確率積分を理解し、実際の計算に使えるようになることを目標とします。

[授業計画と内容]

以下のような課題について、1課題あたり1～2週の授業をする予定です。

1. 復習
2. 連続時間のマルチンゲール
3. 二次変分
4. 伊藤積分の定義と性質
5. 伊藤の補題
6. Levyの定理、指数マルチンゲール
7. 時間変換
8. マルチンゲール表現定理
9. 測度変換とギルサノフの定理
10. 確率微分方程式

[履修要件]

ファイナンス工学1を履修済であること

[成績評価の方法・観点及び達成度]

宿題 (50%) 期末試験 (50%)

[教科書]

I. Karatzas and S. Shreve 『Brownian Motion and Stochastic Calculus』 (Springer)

[参考書等]

(参考書)
授業中に紹介する

----- ファイナンス工学2(2)へ続く ↓ ↓ ↓

ファイナンス工学2(2)

[授業外学習 (予習・復習) 等]

復習は必須です。また、次の授業ではどのようなことを履修するかについて把握しておいてください。

(その他 (オフィスアワー等))

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	産業立地論 Industrial Location Theory			担当者所属・ 職名・氏名	経済研究所 教授 森 知也						
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水1,2	授業 形態		使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
前半で古典的な産業立地論、後半で集積の経済学の理論・実証アプローチを概観し、最先端の空間経済学の文献を自力で読み解き、かつ、独自の理論構築・実証分析のデザインを始めるために必要な知識を獲得することを目的とする。空間経済学に関する一連の講義の中で、最も基礎となる領域をカバーする。(空間経済学とは、都市・地域・国際経済を含む一般的な地域空間を対象とし、距離が重要な役割を果たす経済学の研究分野を言う。)											
[到達目標]											
経済立地、特に集積に関する基本的な理論・実証分析の枠組を体系的に理解し、基本的な定式化を自分で行えるようになる。											
[授業計画と内容]											
講義形式で、以下の内容について厳選した論文を解説する。											
前半：											
<ul style="list-style-type: none"> ・ 連続・ネットワーク立地空間における最適立地問題 ・ 規模・集積の経済と最適立地問題 ・ 空間的競争と産業立地パターン ・ 古典的中心地理論 ・ 農業・都市土地利用モデル 											
後半：											
<ul style="list-style-type: none"> ・ 空間不可能性定理と集積メカニズムの分類 ・ 市場プーリングモデル ・ 技術連関モデル ・ 社会的相互作用モデル ・ 新しい経済地理モデル ・ 輸送における規模・外部経済モデル ・ 集積指標の構築 ・ 最近の理論・実証研究 											
[履修要件]											
中級ミクロ経済学、および、中級統計学以上の統計・計量経済学の知識を前提とする。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
中間試験 期末レポート 講義中の議論への参加											
[教科書]											
使用しない 後半の集積の経済学については、以下のテキストが参考になる：											
----- 産業立地論 (2)へ続く↓↓↓↓ -----											

産業立地論 (2)

Fujita, M., Thisse, J.-F. 2013. Economics of Agglomeration: Cities, Industrial Location, and Globalization. 2nd ed. Cambridge University Press.

邦訳:

徳永澄憲・太田充 (訳). 2017. 集積の経済学: 都市, 産業立地, グローバル化. 東洋経済新報社.

[参考書等]

(参考書)

授業中に紹介する

初回までに、基本的な文献リストはウェブサイトに掲載し、必要に応じて講義中に追加の文献を紹介する。

(関連URL)

http://www.mori.kier.kyoto-u.ac.jp/teaching/lectures/location_theory_2017.html#NEW(講義資料はこのウェブサイトに掲載する。)

[授業外学習 (予習・復習) 等]

予習は不要。講義スライドを参考にして関連文献を読むことで復習し、必要な知識を身につける。

(その他 (オフィスアワー等))

アポイントメントにより随時

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	開発経済学 1 Development Economics I				担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 准教授 高野 久紀					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木1	授業 形態	講義	使用 言語	英語
[授業の概要・目的]											
This course will cover current issues in economic development research throughout the year. Through lectures and homework assignments, we will learn how we can apply economics and econometrics to analyze a wide range of development problems. The course will also provide an introduction to empirical methods in development, including linear regression, panel data analysis, regression discontinuity design, field experiments and structural estimation. The homework assignment include empirical exercise using R.											
[到達目標]											
<ul style="list-style-type: none"> - To be familiar with current topics in development economics. - To be able to understand the required assumptions in empirical studies. - To be able to identify the appropriate empirical framework for a given research question with available data set. - To be able to implement empirical studies using statistical software. 											
[授業計画と内容]											
We will cover the following topics in Development Economics I:											
<ol style="list-style-type: none"> 1. Program Evaluation and Econometrics 2. History, Institutions, and Development 3. Health 4. Education 5. Risk and Insurance 6. Credit Market 											
[履修要件]											
Graduate level core courses in microeconomics, macroeconomics, and econometrics. Students are expected to attend Development Economics II taught in the spring semester.											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
Homework (40%); Presentation (40%); Class participation (20%)											
[教科書]											
使用しない											
[参考書等]											
(参考書)											
Bardhan, P. and Udry, C. 『Development Microeconomics』 (Oxford University Press)											
de Janvry, A. and Sadoulet, E. 『Development Economics: Theory and Practice』 (Routledge)											
Kleiber, C. and Zeileis, A. 『Applied Econometrics with R』 (Springer)											
Reading list will be distributed at the first class meeting.											
----- 開発経済学 1 (2)へ続く ↓ ↓ ↓ -----											

開発経済学 1 (2)

[授業外学習 (予習・復習) 等]

Students are required to learn how to use R to solve the homework assignment. The introductory session will be provided in the class, but we do not have enough time to cover a wide range of R functions.

(その他 (オフィスアワー等))

Office hour: 2-3 pm on Monday and Friday.

Need appointment at

http://hisaki_kono.youcanbook.me/

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	開発経済学 2 Development Economics II	担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 准教授 高野 久紀		
---------------	-------------------------------------	-----------------	------------------	--	--

配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木1	授業 形態	講義	使用 言語	英語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	----

[授業の概要・目的]

This course will cover current issues in economic development research throughout the year. Through lectures and homework assignments, we will learn how we can apply economics and econometrics to analyze a wide range of development problems. The course will also provide an introduction to empirical methods in development, including linear regression, panel data analysis, regression discontinuity design, field experiments and structural estimation. The homework assignment include empirical exercise using R.

The final goal of this course is to facilitate your own research. With this aim, students are required to make a presentations on own prospective research plans at the end of the course.

[到達目標]

- To be familiar with current topics in development economics.
- To be able to understand the required assumptions in empirical studies.
- To be able to identify the appropriate empirical framework for a given research question with available data set.
- To be able to implement empirical studies using statistical software.
- To initiate own research.

[授業計画と内容]

We will cover the following topics in Development Economics II:

1. Credit and Savings
2. Technology Adoption
3. Firms
4. Household Economics
5. Market Transactions
6. Multisector Model and Misallocation

Students are also required to make two presentations on (1) recent papers published in top journals, and (2) your prospective research plan.

[履修要件]

Graduate level core courses in microeconomics, macroeconomics, and econometrics. Students are required to complete Development Economics I.

[成績評価の方法・観点及び達成度]

Homework (30%); Presentation (50%); Class participation (20%)

[教科書]

使用しない

----- 開発経済学 2 (2)へ続く ↓ ↓ ↓ -----

開発経済学 2 (2)

[参考書等]

(参考書)

Bardhan, P. and Udry, C. 『Development Microeconomics』 (Oxford University Press)
de Janvry, A. and Sadoulet, E. 『Development Economics: Theory and Practice』 (Routledge)
Kleiber, C. and Zeileis, A. 『Applied Econometrics with R』 (Springer)
Reading list will be distributed at the first class meeting.

[授業外学習 (予習・復習) 等]

Students are required to learn how to use R to solve the homework assignment. The introductory session will be provided in the class, but we do not have enough time to cover a wide range of R functions.

(その他 (オフィスアワー等))

Office hour: 2-3 pm on Monday and Friday.
Need appointment at
http://hisaki_kono.youcanbook.me/

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	制度と調整の経済学 (演習) The Economic of Institution and Regulation (Seminar)				担当者所属・ 職名・氏名	公共政策大学院 教授 宇仁 宏幸					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
Douglass C. Northの2005年の著書Understanding the Process of Economic Change (邦訳書タイトルは『ダグラス・ノース制度原論』) をテキストに使用し、認知科学の最近の成果を取り込んだ制度経済学に関する理解を深める。											
[到達目標]											
既存の制度的文脈の中で人間が行う社会的学習、および信念の形成という、人間の認知プロセスとの関連の中で、制度変化のプロセスを理解することを目標とする。											
[授業計画と内容]											
<p>下記のテキストの輪読により、上記のテーマに関する理解を深める。1週あたり、2～3章を読む予定である。残りの週は、参加者個々人の研究報告に当てる。テキストであるDouglass C. Northの著書Understanding the Process of Economic Changeの目次と概要は次の通りである。</p> <p>CHAPTER ONE: An Outline of the Process of Economic Change</p> <p>PART I: THE ISSUES INVOLVED IN UNDERSTANDING ECONOMIC CHANGE</p> <p>INTRODUCTION</p> <p>CHAPTER TWO: Uncertainty in a Non-ergodic World</p> <p>CHAPTER THREE: Belief Systems, Culture, and Cognitive Science</p> <p>CHAPTER FOUR: Consciousness and Human Intentionality</p> <p>CHAPTER FIVE: The Scaffolds Humans Erect</p> <p>CHAPTER SIX: Taking Stock</p> <p>PART II: THE ROAD AHEAD</p> <p>INTRODUCTION</p> <p>CHAPTER SEVEN: The Evolving Human Environment</p> <p>CHAPTER EIGHT: The Sources of Order and Disorder</p> <p>CHAPTER NINE: Getting It Right and Getting It Wrong</p> <p>CHAPTER TEN: The Rise of the Western World</p> <p>CHAPTER ELEVEN: The Rise and Fall of the Soviet Union</p> <p>CHAPTER TWELVE: Improving Economic Performance</p> <p>CHAPTER THIRTEEN: Where Are We Going?</p> <p>In this landmark work, a Nobel Prize-winning economist develops a new way of understanding the process by which economies change. Douglass North inspired a revolution in economic history a generation ago by demonstrating that economic performance is determined largely by the kind and quality of institutions that support markets. As he showed in two now classic books that inspired the New Institutional Economics (today a subfield of economics), property rights and transaction costs are fundamental determinants. Here, North explains how different societies arrive at the institutional infrastructure that greatly determines their economic trajectories.</p> <p>North argues that economic change depends largely on "adaptive efficiency," a society's effectiveness in</p>											
----- 制度と調整の経済学 (演習) (2)へ続く↓↓↓											

制度と調整の経済学（演習）(2)

creating institutions that are productive, stable, fair, and broadly accepted--and, importantly, flexible enough to be changed or replaced in response to political and economic feedback. While adhering to his earlier definition of institutions as the formal and informal rules that constrain human economic behavior, he extends his analysis to explore the deeper determinants of how these rules evolve and how economies change. Drawing on recent work by psychologists, he identifies intentionality as the crucial variable and proceeds to demonstrate how intentionality emerges as the product of social learning and how it then shapes the economy's institutional foundations and thus its capacity to adapt to changing circumstances.
(from <http://press.princeton.edu/titles/7943.html>)

[履修要件]

特になし

[成績評価の方法・観点及び達成度]

出席と報告内容で評価する。

[教科書]

Douglass C. North 『Understanding the Process of Economic Change』 (Princeton University Press) ISBN: 9780691145952

ダグラス・ノース 『ダグラス・ノース制度原論』 (東洋経済新報社) ISBN:9784492314746 (上記の邦訳書 (監訳者は瀧澤弘和/中林真幸))

[参考書等]

(参考書)

授業中に紹介する

[授業外学習（予習・復習）等]

テキストについては事前に各自で読んでくることが求められる。

(その他（オフィスアワー等）)

オフィスアワーは金曜日第3時限、ただし事前にメールで連絡のこと。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	現代政治経済学 A (演習) Modern Political Economy A (Seminar)				担当者所属・ 職名・氏名	公共政策大学院 教授 宇仁 宏幸					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時間	金4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
<p>これまで主にマルクス主義的観点から階級論を展開してきたEric Olin Wrightは2015年の著書 Understanding Classにおいて、自身のマルクス主義的階級論と、T. ピケティなどの非マルクス主義的階級論とを統合的に理解するための、より広いフレームワークを提示している。この本をテキストに使用し、多様なアプローチを統合した階級理論に関する理解を深める。</p>											
[到達目標]											
<p>資本主義の下で発生する様々な格差を、より体系的に考察するために、階級に関する様々な概念や理論の統合的に理解する。</p>											
[授業計画と内容]											
<p>下記のテキストの輪読により、上記のテーマに関する理解を深める。1週あたり、2つの章を読む予定である。残りの週は、参加者個人の研究報告に当てる。テキストであるEric Olin Wrightの著書 Understanding Class の目次と概要は次の通りである。</p>											
<p>1 From Grand Paradigm Battles to Pragmatist Realism: Towards an Integrated Class Analysis Part 1: Frameworks of Class Analysis 2 The Shadow of Exploitation in Weber's Class Analysis 3 Metatheoretical Foundations of Charles Tilly's Durable Inequality 4 Class, Exploitation, and Economic Rents: Reflections on Sorensen's "Toward a Sounder Basis for Class Analysis" 5 Michael Mann's Two Frameworks of Class Analysis Part 2: Class in the Twenty-First Century 6 Occupations as Micro-classes: David Grusky and Kim Weeden's Reconfiguration of Class Analysis 7 The Ambiguities of Class in Thomas Piketty's Capital in the Twenty-First Century 8 The Death of Class Debate 9 Is the Precariat a Class? Part 3: Class Struggle and Class Compromise 10 Beneficial Constraints: Beneficial for Whom? 11 Working Class Power, Capitalist Class Interests, and Class Compromise 12 Class Struggle and Class Compromise in the Era of Stagnation and Crisis</p>											
<p>Few ideas are more contested today than "class." Some have declared its death, while others insist on its centrality to contemporary capitalism. It is said its relevance is limited to explaining individuals' economic conditions and opportunities, while at the same time argued that it is a structural feature of macro-power relations. In Understanding Class, leading left sociologist Erik Olin Wright interrogates the divergent meanings of this fundamental concept in order to develop a more integrated framework of class analysis. Beginning with the treatment of class in Marx and Weber, proceeding through the writings of Charles Tilly, Thomas Piketty, Guy Standing, and others, and finally examining how class struggle and class compromise play out in contemporary society, Understanding Class provides a compelling view of how to think about the complexity of class in the world today. (from https://www.versobooks.com/books/1903-understanding-class)</p>											
<p>----- 現代政治経済学 A (演習) (2)へ続く ↓ ↓ ↓</p>											

現代政治経済学 A (演習) (2)

[履修要件]

特になし

[成績評価の方法・観点及び達成度]

授業での報告内容と参加態度で評価する。

[教科書]

Eric Olin Wright 『Understanding Class』 (Verso) ISBN:9781781689455

[参考書等]

(参考書)

授業中に紹介する

[授業外学習 (予習・復習) 等]

テキストについては事前に各自で読んでくることが求められる。

(その他 (オフィスアワー等))

オフィスアワーは金曜日第3時限、ただし事前にメールで連絡のこと。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	現代中国経済分析1 (演習) Analysis of Contemporary Chinese Economy 1 (Seminar)	担当者所属・ 職名・氏名	地球環境学舎 教授 劉 徳強
---------------	--	-----------------	----------------

配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語及び英語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	---------

[授業の概要・目的]
この授業では、中国経済に関する学術論文を輪読し、最後に各自で簡単な発表をしてもらう。このような作業を通じて、現実の経済問題をどのように理論的に捉えるか、どのように分析するか、について議論したい。

[到達目標]
中国経済に関する論文の輪読と各自の論文の発表により、アカデミックな学術論文の書き方を理解する。

[授業計画と内容]
スケジュール：
①Orientation
②Collectivization and China's Agricultural Crisis in 1959-1961
③The Household Responsibility System in China's Agricultural Reform
④Rural Reforms and Agricultural Growth in China
⑤The Determinant of Farm Investment and Residential Construction in Post-Reform China
⑥The Household Responsibility System and the Adoption of Hybrid Rice in China
⑦Prohibition of Factor Market Exchanges and Technological Choice in Chinese Agriculture
⑧Public REsearch Resource Allocation in Chinese Agriculture
⑨Hybrid Rice Innovation in China
⑩Education and Innovation Adoption in Agriculture
⑪The Needham Puzzle: Why the Industrial Revolution Did Not Originate in China
⑫～⑮Presentation

[履修要件]
特になし

[成績評価の方法・観点及び達成度]
授業への出席、発表及びレポート等に基づいて総合的に評価する。

[教科書]
授業中に指示する

現代中国経済分析1 (演習) (2)

[参考書等]

(参考書)

林毅夫 『制度、技術と中国農業発展』 (上海三聯書店)

[授業外学習 (予習・復習) 等]

初回授業時に指示する。

(その他 (オフィスアワー等))

授業に関する質問や相談は随時受け付け可。ただし、事前にメールで連絡してほしい。liu@econ.kyoto-u.ac.jp

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	現代中国経済分析2 (演習) Analysis of Contemporary Chinese Economy 2 (Seminar)				担当者所属・ 職名・氏名	地球環境学舎 教授 劉 徳強					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火4	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
この授業では、中国経済と深い関係にあるアジア経済について勉強することにより、中国経済の特徴や問題点、アジア経済における役割と今後の発展方向を明らかにしたい。											
[到達目標]											
受講者にアジア経済に関する基礎知識を身に着けることによって、中国経済をより深く理解してもらいたい。											
[授業計画と内容]											
スケジュール： ①概説 ②アジア経済の変貌と新たな課題 ③アジアの生産ネットワークと地域統合 ④アジアの地域統合の進展と展望 ⑤オフショアリングとアジア経済 ⑥老いるアジアと国際労働力移動 ⑦アジアにおけるイスラム消費市場 ⑧中国の経済成長 ⑨中国の膨張を支える対外戦略 ⑩中国の勃興とエネルギーを巡る諸問題 ⑪政治経済学からみた中国とASEAN関係 ⑫対立と協調のインドと中国 ⑬アジアの国際交通インフラの開発と物流 ⑭アジアの新たな開発協力モデル ⑮総合討論 ⑯まとめ											
[履修要件]											
「現代中国経済分析1」を履修することが望ましい。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
授業への出席、報告及び討論への参加状況により総合的に判断する。											
[教科書]											
平川均など『新・アジア経済論 中国とアジア・コンセンサスの模索』(文真堂)											
[参考書等]											
(参考書) 授業中に紹介する											
----- 現代中国経済分析2 (演習) (2)へ続く↓↓↓											

現代中国経済分析 2 (演習) (2)

[授業外学習 (予習・復習) 等]

初回授業時に指示する。

(その他 (オフィスアワー等))

授業に関する質問や相談は随時受け付け可。ただし、事前にメールで連絡してほしい。liu@econ.kyoto-u.ac.jp

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	Readings on Institutional Economics Introduction to Institutional Economic	担当者所属・ 職名・氏名	総合生存学館 教授 IALNAZOV, Dimitar Savov
---------------	---	-----------------	-----------------------------------

配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金2	授業 形態	講義	使用 言語	英語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	----

[授業の概要・目的]

This course is interactive and designed for a relatively small number of students. Its goal is to help the students not just learn about the main concepts and theories in institutional economics, but also how to apply these in practice to analyze developing and emerging economies. The idea behind the course is that institutions matter greatly for economic development and that the divergence of development paths can be explained by the cross-country variation in the quality of institutions. At the end of the course, the students should be able to apply the institutional approach to the analysis of individual country cases, as well as to cross-country comparisons.

During the course we will also seek answers to the following questions: (1) what policies and institutions are needed to achieve sustainable economic development? (2) why do similar economic reforms succeed in some countries but fail in others? (3) how can we explain variations in economic performance among developing and emerging countries?

[到達目標]

By the end of the course, the students should be able to apply institutional economic concepts and theories to analyze specific developing and emerging economies.

[授業計画と内容]

この授業は留学生対象ですが、日本人の学生（若干名）も履修できます。履修を希望する日本人学生は名前、回生、学籍番号を明記の上、メールでヤルナゾフ (ialnazov@econ.kyoto-u.ac.jp) までお知らせください。

The course will be held in English and the students are expected to make presentations and participate in discussions in English. However, the students may choose to write their essays either in English or in Japanese.

Course description (some other topics may be included at the discretion of the instructor)

1. Introduction
2. Causes of economic growth and development I (the neoclassical theory)
3. Causes of economic growth and development II (the new growth theory)
4. Causes of economic growth and development III (development economics)
5. The political economy of government policies (the public choice theory)
6. Case studies of economic growth and development (East Asian countries, Eastern European countries, Latin American countries)
7. Student presentations on the mid-term essays
8. Main concepts of new institutional economics (NIE) I (bounded rationality, opportunistic behavior, transaction costs)
9. Main concepts of new institutional economics (NIE) II (property rights, contract enforcement, credible commitment)
10. Main concepts of historical institutional economics (HIE) (path dependence, lock-in, formal and informal institutions)
11. How to measure institutional quality? Main attempts to quantify and measure the cross-country variations

Readings on Institutional Economics(2)

in institutions

12. Institutions vs. geography

13. Institutions and social capital

14. Case studies of institutional change (East Asian countries, Eastern European countries, Latin American countries)

15. Student presentations on the end-term essays

[履修要件]

Basic ability to communicate in English and read academic texts in English is necessary. Depending on the level of students' English proficiency, we may also use some Japanese during the classes.

[成績評価の方法・観点及び達成度]

Performance evaluation will be done according to the following criteria:

1. Participation (50%): attendance, participation in the discussions, and presentations on the required readings and written assignments

2. Two essays (50%): their quality and presentations

[教科書]

John Groenewegen et al. 『Institutional Economics: An Introduction』 (Palgrave) (The students are not obliged to buy this textbook)

Acemoglu D. and J. Robinson 『Why Nations Fail?』 (Crown Business) (The students are not obliged to buy this textbook)

Michael Todaro and Stephen Smith 『Economic Development 12th edition』 (Pearson) (The students are not obliged to buy this textbook)

[参考書等]

(参考書)

授業中に紹介する

(関連URL)

<http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/~ialnazov/>

[授業外学習(予習・復習)等]

During each class the instructor will explain what exactly students should prepare for the next week's class. Explanations about the mid-term and end-term essays will also be provided.

(その他(オフィスアワー等))

Students who wish to consult with the instructor during the office hours should make an advance appointment by e-mail. The e-mail address is <ialnazov@econ.kyoto-u.ac.jp>.

Readings on Institutional Economics(3)へ続く↓↓↓

授業科目名 <英訳>	比較経済政策システムA (演習) Comparative Study of Economic Policy System A (Seminar)				担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 教授 黒澤 隆文					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火1,2 隔週開講	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
<p>本演習では、産業政策論・産業論の観点から、日本とこれを含む東アジア、東南アジア、南アジア、ヨーロッパ、北米、中南米等の経済システム、経済政策体系、産業政策を、政策対象である産業・企業の状況を含めて比較検討する。経済政策と実態経済の関連や、そこでの企業・産業の動態に関心を持つ受講生に対し、産業史・経営史・経済史と産業政策史によるアプローチの意義を伝え、それらの方法論の習得を助け、各自の研究の一助とすることが、本演習の目的である。</p> <p>演習は輪読を基本とし、適宜、担当教員の報告を含め、個別研究発表を織り交ぜる。</p>											
[到達目標]											
<p>受講者は、いわゆる産業論と、産業競争力に密接に関連する各種の政策体系（産業政策を中心に、通商外交政策、競争政策、財政政策、労働福祉政策、地域政策等を含む）に関する基本概念・分析視角を習得する。同時に、歴史的視角を用いた政策分析・企業分析の基本的な方法を習得する。経済紙・ビジネス誌の産業政策・産業関連記事をアカデミックな方法論で読み解けるようになり、産業政策と企業競争力に関する学術論文の分析を理解し、かつこれを批判的に位置付けられるようになることが、本講義の到達目標である。</p>											
[授業計画と内容]											
<p>講義は基本的に隔週で実施し、第1・2限目を通して行う。初回は4月11日、第2回は4/18とし、以後隔週とする予定。〔掲示・KULASIS情報を確認のこと〕。</p> <p>輪読を基本とするが、随時研究発表の場を設ける。</p> <p>1. イントロダクション 演習の目的と課題、輪読書の最終選定</p> <p>2-8. 日本と各国の政策政策システムに関する基本文献の輪読〔英語文献を含む〕</p> <p>9-14. 政策と多国籍企業の関連に関する基本文献の輪読〔英語文献を含む〕</p> <p>15. 総括</p> <p>随時研究発表共有の場をも設ける。</p> <p>なおフィードバックについては、演習形式でもあり、毎回の演習の中で実施する。</p>											
[履修要件]											
<p>履修者には、「史的分析概論」の同時受講を推奨する（義務とはしない）。</p> <p>授業は基本的に日本語によって行うが、研究発表においては英語の報告・議論を含めるため、英語学習・英語による学習への意欲のある者の参加を歓迎する。</p>											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
<p>評価の方法は、演習への参加実績（報告内容・議論への貢献）〔50%〕と個別報告の水準〔50%〕による。</p> <p>評価の基準 経済システムに関する基礎概念・分析方法・主要な論争についての理解度、自身の個別研究等の他の分析への応用能力の習得の度合いによる。</p>											
[教科書]											
<p>輪読図書は、参加者の研究テーマと学習歴を聴取の上決定するが、さしあたり、以下を候補としておく。</p> <p>①日本の通商産業政策史のいわば「正史」ともいえる、通商産業政策史本産委員会編『通商産業政</p>											
比較経済政策システムA (演習) (2)へ続く↓↓↓											

比較経済政策システムA (演習) (2)

策史1980-2000』(2011~)各巻。

②安部悦生編『グローバル企業 国際化・グローバル化の歴史的展望』文眞堂 2017年
その他, 下記の主題についての教材・ジャーナル論文を演習中に配布して使用する。

②カルテルと競争政策・反独占政策に関する新しい研究動向を示した各種英語文献

③日本経済論・政策論に関する2000年以降の英語文献〔同上〕

④産業政策の国際比較に関する英語文献〔同上〕

[参考書等]

(参考書)

授業中に紹介する

(関連URL)

<http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/~kurosawa/>

[授業外学習 (予習・復習) 等]

輪読教材およびその他指示したテキスト・課題の事前学習が必須である。

(その他 (オフィスアワー等))

オフィスアワーは, 20分以内の相談に関しては, 演習終了後とする。それ以外については, 14:00-15:00に対応する。

※オフィスアワーの詳細については, KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	比較経済政策史 A (演習) Comparative History of Economic Policy A (Seminar)				担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 教授 黒澤 隆文					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火1,2 隔週開講	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
本演習では、歴史的な分析視角から、各国・各地域の産業史と広義の産業政策の関係について学ぶ。また「産業論」と称され、組織論研究と経営学の双方にまたがる領域について、事例を通じて学習を行う。											
[到達目標]											
広義の「経営史」(Business History)の手法・概念にもとづき、政策、産業・企業を分析する能力を習得する。											
[授業計画と内容]											
<p>輪読を基本に、参加者の個別報告を組み合わせる。下記の日本語文献と主題を軸に、英語文献・ジャーナル論文を含め、受講者の学習歴と研究計画を踏まえて決定。</p> <p>★本演習は1・2時限連続、隔週で実施。実施サイクルは開講時に周知する。</p> <p>〔輪読候補〕 通商産業政策史編纂委員会編『通商産業政策史』各巻 *アジア各国・欧州・アメリカ等については、受講者の構成と学習歴に即して選定。 〔主題/輪読書対象巻〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中小企業政策 ・商務流通政策 ・産業技術政策 ・知的財産政策 											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
<p>方法: 出席状況、演習参加への積極性、輪読・個別報告の水準による。</p> <p>基準: 各産業と政策領域の特質に関する理解度、および、本演習に直接に関連する個別研究の成果を基準とする。</p>											
[教科書]											
授業中に指示する											
比較経済政策史 A (演習) (2)へ続く↓↓↓											

比較経済政策史 A (演習) (2)

[参考書等]

(参考書)

上記〔授業計画と内容〕を参照のこと。

(関連URL)

<http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/~kurosawa/>

[授業外学習 (予習・復習) 等]

上記の輪読書・参考文献についての事前学習が必須である。個別主題に関するディスカッションにおいて理解度の不足が確認された事項については、復習を求める。

(その他 (オフィスアワー等))

毎回の予習を前提とする。オフィスアワー: 毎週授業終了後。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	比較経済政策史 B (演習) Comparative History of Economic Policy B (Seminar)				担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 教授 黒澤 隆文					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火1,2 隔週開講	授業 形態	演習	使用 言語	英語
[授業の概要・目的]											
<p>本演習では、歴史分析の観点に立ちつつ、経済社会の多様性に着目し、各国・各地域社会が持つ政策体系の形成史や経済発展過程を分析する目を養う。分析対象地域としては、日本を含む東アジアと、ヨーロッパ、および北米をとりあげるが、特にヨーロッパに力点を置きたい。また、今日の世界で多国籍企業が果たす役割にも留意しつつ、企業と政策の関係の歴史的な発展史についても検討したい。</p>											
[到達目標]											
[授業計画と内容]											
<p>授業は演習形態で行い、輪読を基本とするが、上記の授業目的に合致する範囲で、参加者の個別報告を組み合わせる。さしあたりは、戦時体制を比較史的に分析した下記文献を予定しているが、日本語文献、および、英文ジャーナル論文等も含め、受講者の学習歴・研究計画を聴取のうえ、最終決定する。</p> <p>★本演習は1・2時限連続で、また隔週で実施する。実施サイクルについては、開講時にアナウンスする。</p> <p>〔輪読候補〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Mark Harrison(ed.) The Economics of World War II: Six Great Powers in International Comparison, Cambridge 1998 ・ その他については、2013年夏季休業期間中に、下記URLで紹介する。 											
[履修要件]											
大学入学程度の世界史の基礎知識、大学卒業程度の経営学と経済史の基礎的な知識											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
<p>方法: 出席状況、演習参加への積極性、輪読・個別報告の水準による。</p> <p>基準: 経済社会の多様性とその歴史的背景、各地域の政策体系の特質に関する理解度や、本演習に関連する個別研究の水準を基準とする。</p>											
[教科書]											
上記〔授業計画と内容〕を参照のこと。											
比較経済政策史 B (演習) (2)へ続く↓↓↓											

比較経済政策史B (演習) (2)

[参考書等]

(参考書)

上記〔授業計画と内容〕を参照のこと。

(関連URL)

<http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/~kurosawa/>

[授業外学習 (予習・復習) 等]

(その他 (オフィスアワー等))

毎回の予習を前提とする。オフィスアワー: 毎週授業終了後。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	比較経済発展論 A (演習) Comparative Economic Development A (Seminar)				担当者所属・ 職名・氏名	東南アジア地域研究研究所 教授 水野 広祐					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金5	授業 形態	演習	使用 言語	日本語及び英語
[授業の概要・目的]											
<p>概要：地域研究と経済発展論 一東南アジア・東アジア政治経済とコミュニティー・組織・制度 目的；経済調査やフィールドワークを用いた研究手法を学びながら、東南アジア・東アジア経済について考える。地域の特質を把握するため、生態、政治、文化の変化を見ながらそれらの変化を規定する社会経済関係の変化を分析する。この社会経済関係には、生産、消費、投資のみならず、流通、金融におよび、さらに技術などにおよぶ。本授業では、これらの変化を制度変化と関連づけて考える。地域社会や生態、政治、文化の変化の背後にあったり同時に起こったりする社会経済的变化を特に制度や組織から分析し、同時に、これらの分析を可能にするフィールドや実証研究の方策について学ぶ。ここでいう制度には土地・労働・資本に関する様々な規則や歴史的展開が含まれる。本講義では、農村、工場、都市などの社会経済調査を授業で取り上げ、分析を進化させるための方策、とくに制度分析について学び、同時に、地域や、生態、政治、生態の変化に関する最新理論も議論する。</p>											
[到達目標]											
<p>経済社会調査の方法を習得する。また、特定問題を理解するにあたって経済社会事象をどのように分析するのか、土地・労働・資本などの制度をどのように分析するのかについての方法、とくに農村調査、労働調査、工場調査などの方策を習得する。</p>											
[授業計画と内容]											
<p>経 1. コモンズと制度 (1) 2. コモンズと制度 (2) 3. 森林資源と制度研究 4. 農家経済調査と制度研究 5. 労働調査と制度研究 6. 都市調査と制度研究 7. 村落研究と制度研究 8. 工場調査と制度研究 9. 企業グループ調査</p>											
[履修要件]											
<p>アジアの特定地域ないし特定国における研究を志してください。</p>											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
<p>授業における報告や議論への積極的な参加を判断材料とする</p>											
----- 比較経済発展論 A (演習) (2)へ続く ↓ ↓ ↓											

比較経済発展論A (演習) (2)

[教科書]

使用しない

[参考書等]

(参考書)

- Ostrom, Elinor 『Governing the Commons, The Evolution of Institutions for Collective Action,』 (Cambridge University Press,)
- James C. Scott 『Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance』 (Yale University Press)
- 斎藤修 『比較経済発展論—歴史的アプローチ』 (岩波書店)
- Ian Holliday and Paul Wilding 『Welfare Capitalism in East Asia』 (Palgrave)
- Suehiro Akira 『Capital Accumulation in Thailand』 (Silkwarm Book)
- Daglas North 『Institution, Institutional Change and Economic Development』 (Cambridge University press)
- Jomo, K.S. 『Growth and Structural Change of the Malaysian Economy』 (Macmillan)
- 重富真一 『タイ農村の開発と住民組織』 (アジア経済研究所)
- Thee Kian Wie 『Indonesian Economy Since Independence』 (ISEAS)
- Mizuno Kosuke et al. 『Catastrophe and Regeneration at the Indonesian Peatland, Ecology, Economy and Society』 (National University of Singapore Press)
- 根岸信 『商事に関する慣行調査報告書: 合股の研究』 (東亜研究所)
- Endo Tamaki 『Living with Risk』 (Kyoto University Press)
- Ann Booth 『Economic Change in Modern Indonesia Colonial and Post-Colonial Comparisons』 (Cambridge University Press)

(関連URL)

http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/staff/mizuno/mizuno_ja.html

[授業外学習 (予習・復習) 等]

授業における議論を特定国や地域の状況と対応できるよう、特定国や地域における研究をすすめること。

(その他 (オフィスアワー等))

議論や訪問は歓迎です。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	社会政策論 1 Social and Labor Policy 1				担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 教授 久本 憲夫					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
<p>社会政策の主要目的は、雇用システムと社会保障体制の相互規定関係の解明にあり、ミクロレベルの雇用システムである職場・企業から、マクロレベルの産業・国家レベルと雇用システムが社会保障といかなる関係に立っているのかを理論的実証的に検討することである。この授業では、現代福祉国家に関する代表的な論文を読み、それらが提示する論点について議論を深めることを目的とする。</p>											
[到達目標]											
<p>現代福祉国家に関する基本文献の読解を通じて、主要な論点について、確かな知識を獲得し、社会政策についての学問的素地をつくる。</p>											
[授業計画と内容]											
<p>教科書のなかから、以下の主要論文を対象とする予定であるが、一部変更することがある。初回はオリエンテーション、最終回は全体討論にあてる予定である。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.The Welfare State in Historical Perspective. 2.Citizenship and Social Class 3.Universalism versus Selection 4.What is Social Justice? 5.The Fiscal Crisis of the State 6.Some contradictions of the Modern Welfare State 7.The Powe Resources Model 8.The Meaning of the Welfare State 9.The Two Wars against Poverty 10.the New Politics of the New Poverty 11.Three World of Welfare Capitalism 12.Beyond Universalism and Particularism:Rethinking Contemporary Welfare Theory 											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
報告(20%)、内容理解(40%)、議論への参加度(40%)により、評価する。											
[教科書]											
Pierson,C/Castles,F G. 『The Welfare State Reader,Second Edition』 (Polity Press)											
----- 社会政策論 1(2)へ続く ↓ ↓ ↓ -----											

社会政策論 1 (2)

[参考書等]

(参考書)

授業中に紹介する

[授業外学習 (予習・復習) 等]

授業前に、必ず論文を一読しておき、議論すべき論点を明確化しておくこと。また、授業ののちには再読して理解の定着化と論点の整理をおこなうこと。

(その他 (オフィスアワー等))

社会政策の課題について、研究者としての基本知識と批判能力を身につけようとする心がけが必要である。関連文献はもちろん、異なる立場からの文献も検討し、労働省や労働政策研究・研修機構など多様な研究機関のHPを活用することが望ましい。

特定のオフィスアワーは設定しない。随時受け付けるが、必ず事前にメールで連絡し了解を得ておくこと。hisamoto@econ.kyoto-u.ac.jp

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	社会政策論 2 (演習) Social and Labor Policy 2 (Seminar)		担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 教授 久本 憲夫							
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
近年の企業での雇用システムの変化と社会保障や企業年金などの変化が日本全体にどのような影響をおよぼしているのか。関連文献の検討を通じて、明らかにしていく。また、研究者として必須である能動的学習能力の獲得を重視し、必要に応じて論文作成のトレーニングをおこなう。											
[到達目標]											
修士論文を書くための基本的な思考能力、論理展開、論文形式などについて、授業参加者の実践的な報告に積極的に加わることによって育成する。											
[授業計画と内容]											
必要な点について講義したのちに、主として下記のテーマの中からより具体的テーマを設定する。修士論文作成トレーニングの観点から、参加者の報告について、議論・検討する。(かっこ内は例示)											
<ul style="list-style-type: none"> ・雇用関係 (雇用関係と非雇用関係の境界、正規雇用と非正規雇用の関係) ・雇用政策 (失業対策の国際比較、積極的労働市場政策としての能力開発) ・労働時間政策 (裁量労働制における労働量規制の可能性) ・雇用平等政策 (男女雇用平等、男女賃金格差の理由) ・公的年金制度 (国民基礎年金の問題点と諸外国の試み、受給年齢の引き上げと雇用労働) ・医療制度 (持続可能な後期高齢者医療制度とは?) ・最低生活保障 (どのようなセーフティーネットが望ましいか。就労と福祉の実現可能な望ましい関係は何か) 											
[履修要件]											
社会政策1を履修していることが望ましいが、必須とはしない。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
報告(40%)、内容理解(30%)、議論への参加度(30%)により、評価する。											
[教科書]											
授業中に指示する											
-----社会政策論 2 (演習) (2)へ続く↓ ↓ ↓											

社会政策論 2 (演習) (2)

[参考書等]

(参考書)

エスピン=アンデルセン 『福祉資本主義の三つの世界』 (ミネルヴァ書房) ISBN:4-623-03323-6
仁田道夫/久本憲夫 『日本的雇用システム』 (ナカニシヤ出版) ISBN:978-4-7795-0302-3

[授業外学習 (予習・復習) 等]

講義および博士後期課程の院生などの論文報告などを参考に、参加者は、自分の研究テーマについて、授業のなかで報告することを義務付ける。よい報告をするためには、「知の消費者」ではなく、「知の生産者」として自己を日々鍛えることが重要である。こうした心構えを持って参加してほしい。

(その他 (オフィスアワー等))

基本知識にもとづき研究者として議論できることを目標にし、論点・問題点を明確化し、論文作成のための基礎訓練に心がけること。

特定のオフィスアワーは設定しない。随時受け付けるが、必ず事前にメールで連絡し了解を得ておくこと。 hisamoto@econ.kyoto-u.ac.jp

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	国際貿易論 A International Trade Theory A				担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 教授 神事 直人					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語及び英語
[授業の概要・目的]											
本科目は大学院初級レベルの国際貿易論である。当該分野の主要なトピックを幅広く取り上げる。本科目を通じて、伝統的な国際貿易論ならびに最近の国際貿易論に関する理解を深めるとともに、当該分野で論文を書く基礎力を養うことを目的とする。											
[到達目標]											
国際貿易論の分野における理論分析及び実証分析の基礎を理解することができ、自らが当該分野の研究を行うための基礎力を習得する。											
[授業計画と内容]											
授業スケジュールは以下の通りである。講義は主に英語で行われ、部分的に日本語で補足説明を行う。											
第1回 ガイダンス 第2回 Trade in the Global Economy 第3回 Trade and Technology: The Ricardian Model 第4回 Gains and Losses from Trade in the Specific-Factors Model 第5回 Trade and Resources: The Heckscher-Ohlin Model 第6回 Movement of Labor and Capital between Countries 第7回 前半の復習と問題演習 第8回 Increasing Returns to Scale and Monopolistic Competition 第9回 Offshoring of Goods and Services 第10回 Import Tariffs and Quotas under Perfect Competition 第11回 Import Tariffs and Quotas under Imperfect Competition 第12回 Export Subsidies in Agriculture and High-Technology Industries 第13回 International Agreements: Trade, Labor, and the Environment 第14回 後半の復習と問題演習 期末試験											
[履修要件]											
学部レベルのミクロ経済学とマクロ経済学に関する知識が必要である。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
平常点と複数回の宿題、および期末試験により評価する予定である。											
----- 国際貿易論 A(2)へ続く ↓ ↓ ↓ -----											

国際貿易論 A (2)

[教科書]

Feenstra, Robert C. 『International Trade, Third edition』 (Worth Publishers) ISBN:978-1-4292-7844-7

[参考書等]

(参考書)

授業の中でリーディングリストを配布する。

[授業外学習 (予習・復習) 等]

テキストを読むとともに、演習問題に取り組むことが求められる。

(その他 (オフィスアワー等))

オフィスアワーの曜日・時間は最初の授業でアナウンスする。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	地域産業分析 1 Analysis of Regional Industry 1			担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 教授 岡田 知弘						
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月3,4,5隔週開講	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
本講義では、地域経済・地域産業の理論・歴史・現状分析に関わる1980年代以来の研究史を、岡田の著作とそれに関する文献を批判的に検討するとともに、地域経済学の研究課題や方法についての理解を深めることを目的にする。あわせて、研究報告とその検討も随時行い、研究能力と水準の向上をはかる。											
[到達目標]											
資本主義の下における地域経済、地域産業を分析するための基本的素養を身につけるとともに、方法論についての基礎的な理解を深める。											
[授業計画と内容]											
前期を通して、隔週で講義を行う。											
主として、下記の著作、論文を検討する。											
○『日本資本主義と農村開発』法律文化社、1989年、序章、第2章、第4章、第5章、第7章											
○「高橋財政とニューディール」『新しい歴史学のために』第170号、1983年											
○「地域経済の国際化」『経済科学通信』第41号、1984年											
○「原子力発電の経済的諸問題」『公害研究』第14巻第1号、1984年											
なお、文献講読と研究報告に日程については、第一回目の講義の際に、受講生と打ち合わせのうえで、決定する。											
[履修要件]											
政治経済学、地域経済に関する基礎知識を有していることが望ましい。本講義を、受講するものは、地域産業分析2も、受講すること。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
各自が分担する報告の内容と日常の討論参加態度によって評価する。											
[教科書]											
検討対象とする著作、論文については、事前に示すので、複写等を含めて入手しておくこと。入手困難なものは、PDFで配布する予定。											
[参考書等]											
(参考書) 授業中に紹介する											
----- 地域産業分析 1(2)へ続く ↓↓↓ ↓↓↓ ↓↓↓ -----											

地域産業分析 1 (2)

[授業外学習 (予習・復習) 等]

テキストは、事前に必ず読んで、論点、疑問点を準備しておくこと。ゼミ終了後は、報告者のレジュームも活用して復習しておくこと。

(その他 (オフィスアワー等))

昼休み時間、研究室にいるので随時受け付ける。電子メールでの連絡を歓迎する (アドレスは okada@econ.kyoto-u.ac.jp) 。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	地域産業分析 2 Analysis of Regional Industry 2	担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 教授 岡田 知弘
---------------	---	-----------------	-----------------

配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	月3,4,5 隔週開講	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	-------------	----------	----	----------	-----

[授業の概要・目的]

本講義では、地域経済・地域産業の理論・歴史・現状分析に関わる1990年代以来の研究史を、岡田の著作とそれに関する文献を批判的に検討するとともに、地域経済学の研究課題や方法についての理解を深めることを目的にする。あわせて、研究報告とその検討も随時行い、研究能力と水準の向上をはかる。

[到達目標]

資本主義の下における地域経済、地域産業を分析するための基本的素養を身につけるとともに、方法論についての基礎的な理解を深める。

[授業計画と内容]

後期を通して、隔週で講義を行う。
主として、下記の著作、論文を検討する。

- 「地域経済国際化の構図と位相」杉本昭七編『現代世界経済の転換と融合』同文館出版、1993年
- 「1980年代後半の日本資本主義と地域」『経済』第347号、1993年
- 「経済のグローバル化と地域産業」鈴木茂他編『中小企業とアジア』昭和堂、1999年
- 「日本の農業・食料政策の転換とアグリビジネス」中野一新編『アグリビジネス論』有斐閣、1998年
- 「地域産業の発展方向と農業の役割」『農林業問題研究』第32巻第3号、1996年
- 「重化学工業化と都市の膨張」成田龍一編『近代日本の軌跡』9、吉川弘文館、1993年
- 「四日市における資本蓄積と都市形成」『三重県史研究』第12号、1996年
- 「四日市臨海工業地帯の形成」『経済論叢』第158巻第6号

なお、文献講読と研究報告に日程については、第一回目の講義の際に、受講生と打ち合わせのうえで、決定する。

[履修要件]

政治経済学、地域経済に関する基礎知識を有していることが望ましい。本講義を、受講するものは、地域産業分析1も、受講すること。

地域産業分析 2(2)へ続く ↓ ↓ ↓

地域産業分析 2 (2)

[成績評価の方法・観点及び達成度]

各自が分担する報告の内容と日常の討論参加態度によって評価する。

[教科書]

検討対象とする著作、論文については、事前に示すので、複写等を含めて入手しておくこと。入手困難なものは、PDFで配布する予定。

[参考書等]

(参考書)

授業中に紹介する

[授業外学習 (予習・復習) 等]

テキストは、事前に必ず読んで、論点、疑問点を準備しておくこと。ゼミ終了後は、報告者のレジュームも活用して復習しておくこと。

(その他 (オフィスアワー等))

昼休み時間、研究室にいるので随時受け付ける。電子メールでの連絡を歓迎する (アドレスは okada@econ.kyoto-u.ac.jp) 。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	財政学 B Public Finance B	担当者所属・ 職名・氏名	地球環境学舎 教授 諸富 徹
---------------	---------------------------	-----------------	----------------

配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水1,2 隔週開講	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	-----------	----------	----	----------	-----

[授業の概要・目的]

本講義では、現代税制改革論議の理論的基礎を学習することを目的とする。とくに、所得課税に焦点を当てる。所得税改革をめぐるのは、ホップス以来、所得税と支出税の優劣論争が連綿と続いてきた。特にアメリカでは所得税の支出税への転換、法人税のキャッシュフロー法人税への転換を支持する議論が強い。しかし本当にそれは望ましいのか。本講義では批判的に検討する。

[到達目標]

本講義を通じて、現代税制改革をめぐる論争の主要論点をほぼカバーすることができる。それを通じて、さまざまな税制改革提案がどのような意図で、何を狙ったものなのか、瞬時に理解できる素養をもつことが目標である。

[授業計画と内容]

本講義は、教科書に沿って、どの学部出身であろうと初学者にも分かる形で体系的に財政学の講義を行うことで、基礎知識を獲得してもらうことを目的とする。その内容は下記の通りで、財政学の主要トピックスをほぼ網羅するものとなる。

本講義は、教科書を輪読する演習形式で進めるが、その内容は、特に経済学や財政学、あるいは政治学の基礎知識がなくても理解可能である。講義形式は、担当教員が一方的に話すのではなく、テキスト輪読形式(参加者がテキスト内容について順番に報告を担当)とし、参加者相互の議論を通じた理解を重視する。そういう意味で、講義参加者の議論への積極的な参加が求められる。

- (1) イントロダクション①
- (2) イントロダクション②
- (3) 支出税論の源流
- (4) フィッシャーの「支出税」の特徴と意義
- (5) カルドア『支出税』の理論と特徴
- (6) ヴィックリーの支出税論
- (7) カーター報告の現代的意義
- (8) アンドリュースによる「現代的支出税」構想
- (9) ミード報告とイギリス型支出税
- (10) アメリカの消費ベース課税思想
- (11) 経済活動のグローバル化と法人課税
- (12) 現代付加価値税の論理と課題
- (13) 課税ベースの選択と現代租税論の課題①
- (14) 課税ベースの選択と現代租税論の課題②

[履修要件]

「財政学A」もしくは「財政政策論A」を履修済みのこと。

----- 財政学B(2)へ続く↓↓↓ -----

財政学B(2)

[成績評価の方法・観点及び達成度]

1)講義への出席、(2)テキスト輪読報告の担当とその水準、(3)講義でのディスカッションに積極的に参加し、どの程度議論に貢献しているか、という3点により総合的に評価する。

[教科書]

宮本憲一・鶴田廣巳・諸富徹編『現代租税の理論と思想』（有斐閣）（2014年4月刊行）

[参考書等]

(参考書)

宮島洋『租税論の展開と日本の税制』（日本評論社）（1986年9月刊行）
植田和弘・諸富徹『テキストブック現代財政学』（有斐閣）（2016年6月）

[授業外学習（予習・復習）等]

本講義は演習形式なので、教科書で割り当てられた部分については、報告担当の場合は報告準備をするほか、そうでない場合はあらかじめ通読し、論点を理解しておくことが求められる。また、講義後には内容を復習することが求められる。

(その他（オフィスアワー等）)

講義後の時間をオフィスアワーとする。講義内容についての質問、議論など、何でも歓迎する。それ以外の時間帯は、予めメールでアポイントメントを取ること。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	Readings on International Economics Readings on International Economics	担当者所属・ 職名・氏名	総合生存学館 教授 IALNAZOV, Dimitar Savov
---------------	--	-----------------	-----------------------------------

配当年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火2	授業 形態	講義	使用 言語	英語
-----	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	----

[授業の概要・目的]

This is an interactive course designed for a small number of students. Its goals are twofold: (1) to help the students develop knowledge of the basics of international economics and apply that knowledge to the analysis of developing and emerging economies; (2) to enhance the students' ability to make good presentations in English and discuss about related issues in English.

During the first part of the course we will study the basics of international trade, foreign capital flows, exchange rate regimes, and the balance of payments. In addition, we will focus our attention on the understanding of financial crises -- why do crises occur, and what can policy makers do to prevent/ or manage them. The second part of the course will include a comparison of various emerging economies in Europe, Latin America and East Asia. For example, we will find out how countries such as Poland, Russia, Brazil, Argentina, China and Vietnam have dealt with the challenges of economic globalization since the early 1990s.

After obtaining basic knowledge about international economics and emerging economies, the students will be able to explore individual country cases or compare different country patterns of integration in the global economy. The main findings of their term papers will be presented during the last 2 classes at the end of the course.

[到達目標]

By the end of the course, the students should be able to apply international economic concepts and theories to analyze specific developing and emerging economies.

[授業計画と内容]

- Course outline:
1. Introduction
 2. The balance of payments
 3. Exchange rates
 4. Interest rates
 5. The evolution of the international monetary system (from the gold standard to today's fiat money system)
 6. International trade (what is a "small open economy", degrees of trade openness, etc.)
 7. Foreign capital flows (types of foreign investment, degrees of financial openness, the role of MNCs, etc.)
 8. History of financial crises I: the debt crisis of the 1980s
 9. History of financial crises II: the crises of the 1990s (in particular, the Mexican crisis of 1994, the East Asian crisis of 1997, and the Russian crisis of 1998)
 10. History of financial crises III: how did the emerging economies deal with the 2008-2009 global financial crisis and the eurozone sovereign debt crisis
 11. Comparison of various emerging economies I: Eastern Europe
 12. Comparison of various emerging economies II: Latin America
 13. Comparison of various emerging economies I: East Asia
 14. Student presentations on the term papers
 15. Student presentations on the term papers

Readings on International Economics (2)

[履修要件]

The students should be able to communicate in English to a certain extent and to read academic texts in English. The students can choose to write their term papers either in English or in Japanese. Depending on the English proficiency level of the students, we may also use some Japanese during the classes.

[成績評価の方法・観点及び達成度]

The students' performance will be evaluated according to the following criteria:

1. Participation (50%): attendance, presentations on the required readings and written assignments, participation in the discussions
2. Term paper (50%): its quality and presentation

[教科書]

未定

The required readings will be announced by the instructor at the beginning of the course. We may use parts of the famous textbook by Paul Krugman and Maurice Obstfeld (International Economics, 8th edition, Addison-Wesley, 2009). In addition, the students are encouraged to study various articles from leading economic newspapers and journals such as The Financial Times, The Wall Street Journal, The Economist, etc.

[参考書等]

(参考書)

授業中に紹介する

Information about various reference materials will be provided by the instructor at the beginning of the course.

(関連URL)

<http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/~ialnazov/>

[授業外学習 (予習・復習) 等]

During each class the instructor will explain what exactly the students should prepare for the next week's class. Explanation about the term paper requirements will be also provided.

(その他 (オフィスアワー等))

There will be no strictly defined office hour but the students are encouraged to talk with the instructor after each class or to make an appointment by e-mailing to ialnazov@econ.kyoto-u.ac.jp.

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	経済哲学 Economic Philosophy		担当者所属・ 職名・氏名	関西学院大学経済学部 原田 哲史							
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火4,5 隔週開講	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
「18世紀末から19世紀前半のドイツ社会経済思想」をテーマとするこの授業は、次の部分からなる。 —18世紀末から19世紀前半までのドイツ社会経済思想を概観する。 —かつて京都大学経済学部・経済学研究科でその時期のドイツの経済思想について取り組んだ出口勇蔵(1909～2003年)教授の優れた成果を、同研究科で学ぶ者として確認し、立脚点とする。 —ユストゥス・メーザー(1720～94年)とアダム・ミュラー(1779～1829年)の保守主義の社会経済思想について考察する。 —フリードリヒ・リスト(1789～1846年)の経済思想について考察する。											
[到達目標]											
18世紀末から19世紀前半までのドイツの社会経済思想を、上記の諸要点に着目して認識していき、それを各自の研究の深化へとつなげていくこと。											
[授業計画と内容]											
第1回・第2回 授業全体の説明、ならびに18世紀末から19世紀前半までのドイツ社会経済思想の概観 第3回・第4回 出口勇蔵のメーザー論、フィヒテ論、アダム・ミュラー論の考察 第5回・第6回 ユストゥス・メーザーの社会経済思想の考察 第7回・第8回 アダム・ミュラーの社会経済思想の考察(1) 第9回・第10回 アダム・ミュラーの社会経済思想の考察(2) 第11回・第12回 フリードリヒ・リストの経済思想の考察(1) 第13回・第14回 フリードリヒ・リストの経済思想の考察(2)、ならびに授業全体のまとめ											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
授業でのプレゼン(60%)、最終レポート(30%)、その他授業への積極性・貢献度(10%)											
[教科書]											
使用しない											
----- 経済哲学(2)へ続く↓↓↓ -----											

経済哲学(2)

[参考書等]

(参考書)

田村信一・原田哲史編『ドイツ経済思想史』（八千代出版）、K.マンハイム『保守主義的思考』（筑摩書房）、J.メーザー『郷土愛の夢』（京都大学学術出版会）、原田哲史『アダム・ミュラー研究』（ミネルヴァ書房）、小林昇『リストの生産力論』（『小林昇経済学史著作集』第VI巻（未来社）所収）、その他、授業で示す。

[授業外学習（予習・復習）等]

報告（テキストの要約と分析・考察をレジユメにまとめて発表）が当たった者は、周到な準備をすること。他の者も、対象文献の該当部分を熟読しておくこと。

(その他（オフィスアワー等）)

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	欧米経済史 B European and American Economic History B		担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 准教授 坂出 健							
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	月5	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
<p>〔国際政治経済学International Political Economy〕 冷戦終結後、唯一の超大国・覇権国となったアメリカは単独行動主義に傾き、911テロへの対応策としてアフガン・イラク戦争に突き進んだ。しかし、それらの戦争は逆にアメリカの中心の覇権秩序を混沌としています。現代の国際社会は、国際政治と国際経済の交錯した複雑な情勢の中で、政策上の諸課題の新たな解決策を求めています。こうした状況の中で注目を浴びているのが「国際政治経済学」と呼ばれる学問分野です。国際政治経済学は、国際政治学・国際経済学の複合的な視座から国際社会の問題に、理論・歴史・政策の三つの側面から探求に取り組むアプローチです。本演習は、近代西欧国際関係の出発点とも評されるウェストファリア体制(1648年#8212)からウィーン体制へ、20世紀の三つの戦争(第一次・二次大戦と米ソ冷戦)にかけての欧米を中心とした国際体制の政治的・経済的展開とそれらを理解する理論的フレームワーク(国際関係論・国際政治経済学)を学習します。理論的フレームワークには大きく二つの潮流があります。第一に、ペロポネソス戦争を叙述したトゥキディデスを遠祖とし、起こっている国際問題にプラグマティックに対処することを旨とするリアリズムの立場、第二に、哲学者カントを代表的論者とする、あるべき理想を国際関係に現実化しようとするリベラリズムの立場である。1970#821290年代においては、これら二つの潮流を継承しつつ、国際関係において経済的事象が決定的であるとの認識に立ったネオ・リアリズム(覇権安定論)・ネオ・リベラリズム(相互依存論)という両者合わせて国際政治経済学というパラダイムが登場しました。また、冷戦・イラク戦争終了後の混沌とした国際秩序(ないし国際無秩序)においては、政治的アクターの認識的相互関係を重視するコンストラクティビズム、アナーキーな社会関係として国際関係をとらえる英国学派が注目を浴びています。本パートはこうした理論諸潮流を、現代のホット・イシューをケース・スタディに用いながら説明します。</p>											
[到達目標]											
<p>本演習は、受講者が、激動する国際政治経済を分析する理論的視座を獲得し、そのために必要な各種文献、内外の紙誌、各種シンクタンクの報告書、インターネットのサイトなどの情報収集の基礎力を身につけることを目標にしております。</p>											
[授業計画と内容]											
<p>第1回 オリエンテーション 第2回 古典的リアリズムの理論 第3回 ネオ・リアリズム 第4回 オフェンシブ・リアリズム 第5回 覇権安定論と国際公共財理論 第6回 リベラリズム 第7回 グローバル・ガバナンス論とデモクラティック・ピース論 第8回 ネオ・コンサバティブ 第9回 国際的相互依存論 第10回 構成主義理論(コンストラクティビズム) 第11回 英国学派・国際社会論 第12回 正戦論 第13回 人道的介入 第14回 議論のまとめ</p>											
----- 欧米経済史B(2)へ続く ↓ ↓ ↓ -----											

欧米経済史B(2)

[履修要件]

特になし

[成績評価の方法・観点及び達成度]

出席・発表点(70点)、期末レポート(30点)

[教科書]

[参考書等]

(参考書)

授業中に紹介する

[授業外学習(予習・復習)等]

予習一事前にPandAで配布する資料を読んだ上で出席してください。

(その他(オフィスアワー等))

金曜3コマ(事前にメールで予約してください)。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	比較社会思想史 History of Social Thought in Comparison				担当者所属・ 職名・氏名	広島大学大学院総合科学研究科 桑島 秀樹 教授					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火4,5 隔週開講	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
18世紀アイルランド生まれの美学者にして社会思想家エドモンド・バーク (Edmund Burke, 1729-1797) による初期著作群に焦点を当て、そのテキストの精読を通じ、バークの思考法と著作成立の社会・時代背景を論ずる。精読テキストとしては、渡英後にロンドンの有名書誌ドッズリより刊行の『崇高と美の哲学的探究 (A Philosophical Enquiry into the Origin of Our Ideas of the Sublime and Beautiful)』(初版1757年、改訂版1759年)、ならびに、渡英前のトリニティ・カレッジ・ダブリン卒業前後にバークを主筆として編纂・販売された週間新聞『改革者 (The Reformer)』(1748年1月~4月、全13号)を使用する。なお、「講義」ではあるが、一部演習形式をとり入れ、受講生諸君にテキストの一部を要約・発表してもらう場合もある。											
[到達目標]											
専門的な思想史研究の基礎体力としての古典テキストの読み方、テキスト成立の時代背景(著者の伝記的バックグラウンドも含む)の深い考察を目指す。いわば《著者の肌のぬくもりを感じるようなテキスト読解力》の涵養こそ、最終的な到達目標といえる。むろん時間的制約もあるので、そのような読解力養成のきっかけをつかめればよい、と思う。											
[授業計画と内容]											
以下、各授業回(隔週開講のため1週に2回分)の内容をしめすように、まず、エドモンド・バークの生涯を追いながら、18世紀のイギリス・アイルランド社会について講じ、併せて彼の初期著作群の位置づけを確認する。そして、渡英後のバークの美学書『崇高と美の哲学的探究』の精読、さらに渡英前のダブリン時代に編纂の週間新聞『改革者』の精読へと続く。 【第1回~第3回: 序論・バークの18世紀とその著作】 エドモンド・バークの生涯および18世紀のイギリス・アイルランド社会と、初期著作群(特に『崇高と美の哲学的探究』と『改革者』)の位置づけの解説など。 【第4回~第9回: 『崇高と美の哲学的探究』を読む】 バーク唯一の体系的美学書(近代最初の「崇高」の理論書)の「序論 趣味について」「第二部 崇高について」「第三部 美について」を詳しく読み解く。 【第10回~第13回: 『改革者』を読む】 バークが大学卒業頃に編纂したダブリンの小週刊新聞にあらわれた「18世紀アイルランド社会改革論」、わけても「趣味・演劇の改革論」「芸術振興論」などを読み解く。 【第14回(最終回): 総括】 講義のまとめ(※このとき最終試験を課す場合もある)。											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
平常点(テキストの要約・発表を含む出席状況) 評価: 約70パーセント、期末試験(論述レポート) 評価: 約30パーセント。											
[教科書]											
※以下、テキストの講義使用部分は、開講時にコピー等で配布予定(ただし、書籍を手許に置くに越したことはない。)											
----- 比較社会思想史(2)へ続く ↓ ↓ ↓ -----											

比較社会思想史(2)

- ・ Oxford Clarendon版の最新バーク全集 (The Writings and Speeches of Edmund Burke, Vol. 1: Early Writings, 1997.) 所収の二つの当該著作 (A Philosophical Enquiry into the Origin of our Ideas of the Sublime and Beautiful, 1757, pp. 185-308. ならびに、The Reformer, 1748, p p.65-128.)。適宜、James T. Boulton (ed.), A Philosophical Enquiry into the Origin of our Ideas of the Sublime and Beautiful, Oxford: Blackwell, 1987. も参照。
- ・ 中野好之訳『崇高と美の観念の起原』みすずライブラリー、1999年 (初版：『エドモンド・バーク著作集 I』1973年所収)。
- ・ 大河内昌訳「崇高と美の起源」『オトランド城／崇高と美の起源』(英国十八世紀文学叢書4)、研究社、2012年。

[参考書等]

(参考書)

〔主参考書〕： ・中澤信彦・桑島秀樹編『バーク読本』昭和堂、2017年 (夏までに刊行予定)、特に桑島執筆の「第4章： 崇高・趣味・想像力」と「第5章： アイリッシュ・コネクション」。
・岸本広司『バーク政治思想の形成』御茶の水書房、1989年。

〔副参考書 (桑島の関連著作)〕： ・桑島秀樹『崇高の美学』講談社選書メチエ、2008年。
・桑島秀樹『生と死のケルト美学—アイルランド映画に読むヨーロッパ文化の古層—』法政大学出版局、2016年。

[授業外学習 (予習・復習) 等]

テキスト精読に際して「レジュメ作成 (要約・補助資料の作成など)」を課された場合は、発表担当日に、必ず参加人数分を印刷のうえ持参のこと。

(その他 (オフィスアワー等))

隔週出講 (月2回の来学) のため、事前にメール等で連絡をいただければ、「授業開始前」もしくは「授業終了後」の時間帯に小一時間ほど研究相談等できます。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	現代日本経営史 (演習) Business History of Modern Japan (Seminar)		担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 准教授 田中 彰							
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金3,4 隔週開講	授業 形態		使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
前年度に続いてA.D. チャンドラーJr.の主要著作を読破し、その理論的枠組みと実証成果を深く理解するとともに、乗り越えるべき課題について探究する。											
[到達目標]											
国・産業・企業の各レベルでの技術的条件、市場的条件を考慮した、より普遍的な比較経営史の理論的枠組みを鍛え、各自の専門研究になんらかのかたちで応用できるようにする。											
[授業計画と内容]											
1. イントロダクション 2. チャンドラー著、鳥羽欽一郎・小林袈裟治訳 (1979) 『経営者の時代——アメリカ産業における近代企業の成立』東洋経済新報社 (原書: Chandler, A. D., Jr., The Visible Hand: The Managerial Revolution in American Business, Belknap Press of Harvard University Press, 1977), 上 3. 同上書, 下 4. チャンドラー著、安部悦生ほか訳 (1993) 『スケールアンドスコープ——経営力発展の国際比較』有斐閣 (原書: Chandler, A. D., Jr., Scale and Scope: The Dynamics of Industrial Capitalism, Belknap Press of Harvard University Press, 1990), 第I・II部 5. 同上書、第III部 6. 同上書、第IV部、結論 7. Chandler, A. D., Jr., (2001) Inventing the Electronic Century: The Epic Story of the Consumer Science Industries, Free Press. ※2016年2月時点の計画であり、変更することがあります。											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
1. 平常の出席・発言1/3 (発言の頻度、「授業の概要・目的」に照らした貢献度) 2. 発表1/3 (テキストの要約等と自身の見解とを明示的に区別すること。論点提起においては、問題提起だけでなく発表者の見解を積極的に示すこと) 3. 期末レポート1/3 (アカデミックライティングの標準ルールに従っていること。自身の専門研究の見地からテキストの意義および限界、発展・応用についての見解が整然と整理されていること)											
[教科書]											
「授業計画と内容」に示したとおり。											
[参考書等]											
(参考書) 橋川武郎・黒澤隆文・西村成弘編 『グローバル経営史——国境を越える産業ダイナミズム』 (名古屋)											
現代日本経営史 (演習) (2)へ続く↓↓↓											

現代日本経営史 (演習) (2)

屋大学出版社, 2016年) ISBN:978-4-81-580836-5

Jones, Geoffrey and Jonathan Zeitlin eds., 『The Oxford Handbook of Business History』 (Oxford University Press, 2007) ISBN:978-0-19-957395-0

[授業外学習 (予習・復習) 等]

教科書および参考書等の予習・復習。

(その他 (オフィスアワー等))

授業を欠席する場合は事前に連絡することを期待します。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	財務会計論 B Financial Accounting B	担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 教授 藤井 秀樹
---------------	-----------------------------------	-----------------	-----------------

配当年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火4,5 隔週開講	授業形態	講義	使用言語	日本語
-----	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	-----------	------	----	------	-----

[授業の概要・目的]

経済社会において会計が果たしている役割を、制度派経済学を応用して分析・検討し、その作業を通じて財務会計の制度的性質を再検討するのが、この授業の目的です。
4限目の授業で各回のテーマに関する講義を行い、5限目の授業で当該テーマに関するレポートを教室で書いてもらいます。このレポートは学習内容の即時強化を目的としたもので、成績評価の資料として活用します。レポートは翌日に、コメントを付して受講生に返却するとともに、講義のなかで解説と講評を行います。
以上に加えて、参加型レポートを数回実施する予定です。このレポートは、受講生の立場から授業テーマに関する独自授業の提案を行ってもらうもので、受講生の授業への積極的な参加を促すことを目的としています。

[到達目標]

この科目を履修し、学修目的を達成することによって、財務会計の制度がどのような考え方で出来上がっているか、そしてそれはどのような要因によってどのように変化するかが、理解できるようになります。そのような理解を応用することで、近年の会計問題や会計現象の理論的意味を、より深く洞察することができるようになります。各回のレポートの課題は、そのような応用力を涵養することを目的として設定されます。

[授業計画と内容]

教科書の内容にほぼ沿って、以下のスケジュールで授業を進めます。各テーマについて、概ね2回分の講義を行う予定です。各テーマと教科書の対応関係はオリエンテーションの時間に指示します。

- 第1講 オリエンテーション／社会と会計
- 第2講 会計のルール—GAAPの考え方—
- 第3講 情報開示の役割—情報の非対称性とレモンの原理—
- 第4講 比較制度分析からみた内的整合性の意義
- 第5講 会計システムの比較制度分析
- 第6講 会計制度の形成プロセスと進化の可能性
- 第7講 会計基準の経済的影響と会計の政治化

[履修要件]

簿記・財務諸表論、ミクロ経済学、ゲーム理論の基礎知識を学習しておくことが望まれます。

財務会計論B(2)

[成績評価の方法・観点及び達成度]

毎回、授業テーマに関連したレポートを教室で作成し、授業の終了時にそれを提出してもらいます。このレポートにもとづいて成績評価を行います。評価は、(1)題意に即した記述内容になっているか(内容面の評価)、(2)レポートに相応しい簡潔な文章表現になっているか(技術面の評価)という2つの観点から、A~Dの4段階で行います。

[教科書]

藤井秀樹 『制度変化の会計学』(中央経済社) ISBN:978-4-502-27630-9
藤井秀樹 『入門財務会計(第2版)』(中央経済社) ISBN:978-4-502-13011-3

[参考書等]

(参考書)

青木昌彦 『比較制度分析に向けて』(NTT出版) ISBN:4-7571-2059-1
青木昌彦, 奥野正寛編著 『経済システムの比較制度分析』(東京大学出版会) ISBN:4-13-042102-6
以上のほか、藤井のHPに補助教材を適宜、アップロードします。各自ダウンロードして授業に持参してください。

HPのURL: <http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/~hujii/myweb/>

(関連URL)

<http://www.fasb.org/home> (アメリカの会計基準SFASを設定している財務会計基準審議会FASBのURLです。)

<http://www.ifrs.org/Pages/default.aspx> (国際財務報告基準IFRSを設定している国際会計基準審議会IASBのURLです。)

<https://www.asb.or.jp/asb/top.do>(わが国の基準設定団体である企業会計基準委員会のURLです。現行の企業会計基準等がアップされています。)

<http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/~hujii/myweb/>(藤井のHPです。教材等をアップしています。)

[授業外学習(予習・復習)等]

「授業計画と内容」に記載しましたように、授業は教科書の内容にほぼ沿って進めていきますので、授業前に必ず各回の授業に関連する章を読んで、予習を行ってください。理解が難しいテーマについては、教科書を再読するなどの方法で、復習を行ってください。予習・復習の時間は、1回の授業につき合計で5時間が、大学設置基準上の目安です。

(その他(オフィスアワー等))

オフィスアワーは、毎週火曜日12時~13時です。メールによる事前予約が必要です。 hujii@econ.kyoto-u.ac.jp

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	経営組織論 (演習) Organizational Theory (Seminar)	担当者所属・ 職名・氏名	経営管理大学院 教授 若林 直樹
---------------	---	-----------------	------------------

配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	月3	授業 形態		使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	--	----------	-----

[授業の概要・目的]

「企業組織におけるネットワーク理論の成果と課題」
 本授業は、企業の組織行動、組織理論の研究において、ネットワーク理論と分析手法が明らかにした成果と課題について検討する。経営学においても、社会関係資本論 (Social Capital) からの分析は数多く行われ、個人間協働ネットワーク、凝集性、コミュニケーションと知識移転、提携、所有関係などの面で研究が進んでいる。近年は、分析手法の発展も著しい。そうした面を理解し、実際のネットワーク分析手法を理解して、分析を行う。

[到達目標]

- ・ 企業組織の研究におけるネットワーク理論とその分析手法を理解する
- ・ 組織のネットワーク分析の手法について理解し、その分析能力を獲得する
- ・ 企業の行動や業績にネットワークがどう影響するかを分析できる

[授業計画と内容]

講義の前半を経営学、組織論でのネットワーク理論、社会関係資本論、およびネットワーク分析についての講義と、先端的な英語文献の通読を行う。それを通じて、ネットワーク理論が、どのような組織行動、企業行動のメカニズムを明らかにしたかについて、検討する。後半は、UCINETやPAJEKなどの基本的な分析ソフトウェアを用いて、実際の分析手法について実習を行う。そして、ネットワーク分析を、個人や企業の業績と同関連させるかについて考える。日程については初回の授業で示す。各回については、以下のように進める。

- 【1-2】 講義概要：ネットワーク理論があきらかにしたもの
- 【3-4】 輪読：ネットワーク、社会関係資本が企業の業績にどう影響するか
- 【5-6】 輪読：現在のネットワーク理論の現状と課題
- 【7-8】 UCINETなどによる社会ネットワーク分析の進め方
- 【9-10】 ネットワークの可視化と現在の分析課題
- 【11-12】 企業データを加えた分析の進め方
- 【13-14】 質的分析との併用

[履修要件]

経営学原理、経営学研究法を取得する方が望ましい。

[成績評価の方法・観点及び達成度]

次の3点の合計から評価する。①授業に毎回参加し、出席は80%以上である。②英語文献の輪読を行う。③ネットワーク分析の実習を行い、課題を提出する。る課題と最終レポート。

経営組織論（演習）(2)

[教科書]

若林直樹 『ネットワーク組織』（有斐閣）
そのほかについては、授業中に支持を吸う。

[参考書等]

（参考書）
授業中に紹介する

[授業外学習（予習・復習）等]

指定文献の購読。また、ネットワーク分析実習も行ってもらおう。

（その他（オフィスアワー等））

火曜日 13:00～14:00（事前に、電子メールでアポイントメントを取ること。）

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	会計文化論B (演習) Accounting Cultural Theory B (Seminar)				担当者所属・ 職名・氏名	経営管理大学院 教授 澤邊 紀生					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金3,4 隔週開講	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
今年度の会計文化論Bでは、アクションリサーチに関する近年の議論を、学術専門誌に掲載された論文を輪読することで検討する。											
[到達目標]											
アクションリサーチについての基本的理解を得る。											
[授業計画と内容]											
輪読対象としては、下記論文を候補としているが、第一回目に受講者の意見を聞いたうえで、最終的に決定する。											
<ul style="list-style-type: none"> ・ Amabile, T., Patterson, C., Mueller, J., Wojcik, T. Odomirok, P. W., Marsh, M. and Kramer, S. J. (2001) Academic-practitioner collaboration in management research: A case of cross-profession collaboration. Academy of Management Journal, 44: 418-435 ・ Inanga, E.L. and Schneider, W.M.B. (2005). The failure of accounting research to improve accounting practice: a problem of theory and lack of communication. Critical Perspectives on Accounting, 16:3, 227-248. ・ Jarzabkowski, P. S. Mohrman and A. G. Scherer (2010) Organization studies as an applied science: The generation and use of academic knowledge about organizations. Organization Studies. 31:9/10, 1189-1207. ・ Labro, E. and Tuomela, T.-S. (2003) On bringing more action into management accounting research: Process considerations based on two constructive case studies. European Accounting Review, 12:3, 409-442. ・ Lukka, K. (2010) The roles and effects of paradigms in accounting research. Management Accounting Research, 21:2, 110-115. ・ Malmi, T. J#228;rvinen, P. and Lillrank, P. (2004) A collaborative approach for managing project cost of poor quality. European Accounting Review, 13:2, 293-317 ・ Mohrman, S. A., Gibson, C. B. and Mohrman, A. M. (2001) Doing research that is useful to practice: a model and empirical exploration. Academy of Management Journal, 44:2, 357-375 ・ Neu, D., Cooper, D. J. and Everett, J. (2001) Critical Accounting Interventions. Critical Perspectives on Accounting, 12, 735-762 ・ Starkey, K. and Madan, P. (2001) Bridging the Relevance Gap: Aligning Stakeholders in the Future of Management Research. British Journal of Management, 12, 3-26. ・ Wouters, M. and Roijmans, D., (2011) Using prototypes to induce experimentation and knowledge integration in the development of enabling accounting information. Contemporary Accounting Research, 28 (2), 708-736. ・ Wouters M. and Wilderom, C., (2008) Developing performance measurement systems as enabling formalization: A longitudinal field study of a logistics department. Accounting, Organizations and Society 33(4-5), 488-515. 											
[履修要件]											
特になし											
----- 会計文化論B (演習) (2)へ続く ↓ ↓ ↓											

会計文化論B (演習) (2)

[成績評価の方法・観点及び達成度]

平常点評価

[教科書]

授業中に指示する

[参考書等]

(参考書)

授業中に紹介する

[授業外学習 (予習・復習) 等]

1. 輪読への準備は必須である。
2. 経済学研究科公認セミナーである会計学セミナーへの参加を強く推薦する。

(その他 (オフィスアワー等))

オフィスアワーは要望に応じて設定する。2週間前までにメールにてアポイントをとること。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	事業創成会計論 B (演習) Accounting for Venture Business B (Seminar)				担当者所属・ 職名・氏名	経営管理大学院 教授 徳賀 芳弘					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木5	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
<p>本講義では、今後、会計学の領域において学術論文を執筆する上で不可欠な「会計学方法論」について講義を行う。修士課程の学生を主要な対象として、国際的に見て現在容認されていると判断される複数の研究方法：①実証的研究、②ケース研究（フィールド・スタディを含む）、③アナリティカルな研究、④記述的研究、および⑤規範的研究、について研究方法とそれに必要な基礎的学習について説明を行う。始めに、過去30年間における日本の会計研究の棚卸を行い、国際的なメインストリームとの相違、当該相違をもたらした特殊な研究状況等について説明を行う。その後、各方法ごとに、日本における過去の研究の評価を行った上で、メインストリームで評価されているペーパーとの比較を通して、日本の研究に欠けている点を取り上げる予定である。</p>											
[到達目標]											
[授業計画と内容]											
<p>以下のようなテーマについて、1課題あたり1～2週の授業をする予定である。</p> <p>①日本における財務会計研究の棚卸 ②会計制度論と計算構造論についての評価 ③実証研究の細分類と日本における研究の評価 ④実証研究の研究方法及び必要な基礎的学習 ⑤日本におけるケース研究の評価、研究方法、および必要な基礎的学習 ⑥日本におけるアナリティカルな研究の評価、研究方法、および必要な基礎的学習 ⑦記述的研究の細分類と日本における研究の評価 ⑧記述的研究の方法と必要な基礎的学習 ⑨規範的研究の細分類と日本における研究の評価 ⑩規範的研究の方法と必要な基礎的学習</p>											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
平常点評価・・・出席点（60％）、授業内でのプレゼンテーション（20％）、授業内での発言（20％）											
[教科書]											
徳賀芳弘・大日方隆編著『財務会計研究の回顧と展望』（中央経済社）ISBN:978-4-502-46800-1											
事業創成会計論B (演習) (2)へ続く↓↓↓											

事業創成会計論B (演習) (2)

[参考書等]

(参考書)

[授業外学習 (予習・復習) 等]

(その他 (オフィスアワー等))

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	人的資源管理論 Human Resource Management	担当者所属・ 職名・氏名	経営管理大学院 教授 関口 倫紀		
---------------	--------------------------------------	-----------------	------------------	--	--

配当年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水2	授業形態	講義	使用言語	日本語及び英語
-----	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	------	----	------	---------

[授業の概要・目的]

The purpose of this course is to review the recent literature on human resource management (HRM) and discuss potential future research and practical implications.

[到達目標]

Understanding of the recent topics in the HRM research
 Understanding of the major theories of HRM
 Understanding of the methodologies used in the HRM research
 Obtaining skills to develop a research proposal on HRM issues
 Applying the academic knowledge of the HRM field to management practice

[授業計画と内容]

The topics covered in this course depend on students' research interests on HRM. Those topics may include but not limited to the following.

1. Recruitment
2. Selection
3. Training and development
4. Compensation and benefits
5. Performance management
6. Labor relations
7. Retention and motivation
8. Fairness
9. Diversity management
10. Language and communication
11. Expatriation and inpatriation
12. Global talent management
13. HRM in foreign subsidiaries
14. Strategic human resource management

[履修要件]

The ability to read and understand the English academic articles

----- 人的資源管理論(2)へ続く ↓ ↓ ↓ -----

人的資源管理論(2)

[成績評価の方法・観点及び達成度]

Based on class participation (20%), presentations and discussion (50%), and a term paper (30%)

[教科書]

授業中に指示する

[参考書等]

(参考書)

授業中に紹介する

[授業外学習 (予習・復習) 等]

Read assigned articles and prepare for class discussion.

(その他 (オフィスアワー等))

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	マーケティング・リサーチ Marketing Research	担当者所属・ 職名・氏名	経営管理大学院 教授 若林 靖永
---------------	------------------------------------	-----------------	------------------

配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	月2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

[授業の概要・目的]

本授業科目は、マーケティング・リサーチの基礎を学ぶ。マーケティング・リサーチとは、市場調査など、マーケティングに関する意思決定に役立たせるために、情報を収集・分析して価値ある提案を創り出すことを意味する。そのための手法としては、アンケート調査などの定量的手法、インタビュー調査などの定性的手法に加えて、今日は取引データ等のビッグ・データ分析などが含まれる。今年度の本授業では、定性的調査の手法についてフォーカスする。

[到達目標]

本授業科目の履修により、定性的調査の種類や特性、事例を理解し、自らさらに学んでいくための基礎を確立する。

[授業計画と内容]

本科目では、教科書に指定した内容について講義し、演習等について指示する。

- 1 イントロダクション
- 2 はじめてみよう:定性研究プロジェクトの始め方
- 3 深層インタビュー
- 4 エスノグラフィーと観察法
- 5 オンライン上の観察とネットノグラフィー
- 6 データ収集のための道具
- 7 学術調査のためのデータ分析・解釈・理論構築のアプローチ
- 8 実務家のための分析・理論・プレゼンテーション
- 9 プレゼンテーション・公開・共有
- 10 最後に ふりかえり
- 11 発表 (1)
- 12 発表 (2)
- 13 発表 (3)
- 14 発表 (4)
- 15 発表 (5)

[履修要件]

特になし

[成績評価の方法・観点及び達成度]

授業時での発表 (50%)、最終リサーチ発表とレポート (50%)

----- マーケティング・リサーチ(2)へ続く↓↓↓

マーケティング・リサーチ(2)

[教科書]

ラッセル・ベルク (著), アイリーン・フィッシャー (著), ロバート・V・コジネッツ (著), 松井 剛 (翻訳) 『消費者理解のための定性的マーケティング・リサーチ』 (碩学舎) ISBN:978-4502175510

[参考書等]

(参考書)

[授業外学習 (予習・復習) 等]

授業時に指示した課題について取り組んで発表すること。
最終課題についてグループでリサーチを行い発表すること。

(その他 (オフィスアワー等))

mkg@econ.kyoto-u.ac.jpで事前にアポイントメントをとること。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	組織文化論 Organizational Culture	担当者所属・ 職名・氏名	経営管理大学院 准教授 山内 裕			
---------------	---------------------------------	-----------------	------------------	--	--	--

配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

[授業の概要・目的]

文化という概念を理解するために、様々な文献を読み込む。文化についてあまり馴染みのない受講生が、この授業を通して様々な視座や概念類を獲得し、自らの研究の構成を定めることができるようにしたい。そのため、経営学における文化概念だけではなく、そもそも背景となる社会学、文化人類学、文化批評、哲学などの多様な言説を押えながら議論していく。
各回リーディングアサインメントを分担して読みレジュメをまとめ、全員で議論する。

[到達目標]

#8226 多義的な文化の概念を総合的に理解し、文化について広い視野から議論できるようにする。
#8226 文化に関する研究の流れを理解し、自らの研究をどこに位置付け、どういう問いを立てるのかを考えることができるようにする。

[授業計画と内容]

- 1週 導入
- 2週 組織文化の概観
- 3週 クリエイティブインダストリー・文化産業
- 4週 文化生産の労働
- 5週 文化闘争の理論: 差異化=卓越化
- 6週 場の自律性
- 7週 テイスト
- 8週 文化とマテリアリティ
- 9週 ポスト・コロニアル理論 Orientalism & Subaltern
- 10週 ポスト・コロニアル理論 Hybridity
- 11週 文化の表象とその危機
- 12週 文化概念の系譜
- 13週 ポストモダン文化
- 14週 ポストモダン社会

[履修要件]

特になし

[成績評価の方法・観点及び達成度]

授業への参加・貢献度合い 50%
各授業でのレジュメと発表の質 50%

組織文化論 (2)

[教科書]

山内, 平本, 杉万, 松井 『組織・コミュニティデザイン論』 (共立出版)

[参考書等]

(参考書)

都度リーディングマテリアルを配布する。

[授業外学習 (予習・復習) 等]

事前に分担してリーディングマテリアルを読み、レジュメにまとめる。

(その他 (オフィスアワー等))

以下のカレンダーに掲載する「Open」の時間帯をオフィスアワーとする。Openの時間を確認し、事前にメールでアポイントメントを取る。

<https://yamauchi.net/officehour>

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 ＜英訳＞	環境経済分析 A Environmental Economic Analysis A	担当者所属・ 職名・氏名	地球環境学舎 教授 諸富 徹 公共政策大学院 特別教授 伊藤 哲夫 経済研究所 准教授 東條 純士
---------------	---	-----------------	---

配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時間	水3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
----------	-------	-----	---	--------------	-------------	-----	----	----------	----	----------	-----

【授業の概要・目的】
 環境政策の基本的な枠組みの講義及び温暖化対策や廃棄物リサイクル対策、国際連携による環境対策などの政策を取り上げ、その実施過程について、実地経験に基づきつつ、環境経済学の理論的な側面とも組み合わせた講義を行う。
 これにより、環境行政の動向と現在の課題についての理解を深め、環境政策の今後のあり方について考える。

【到達目標】
 我が国の環境政策の考え方を理解することにより、施策の立案等今後の環境保全への取り組みに必要な基礎的な知識と思考方法を習得する。

【授業計画と内容】
 (授業計画と内容)
 講義では、以下のテーマを扱う予定。なお、順序は変更する可能性がある。

1. 環境問題の変遷 (伊藤)
2. 公害対策基本法から環境基本法へ (伊藤)
3. 環境基本法と環境政策の体系 (伊藤)
4. 公害規制と公害健康被害対策 (2回) (東條)
5. 地球温暖化問題と環境税(2回) (東條)
6. 循環型社会形成推進基本法と廃棄物・リサイクル対策 (伊藤)
7. 放射性物質による環境汚染対策 (伊藤)
8. 環境経済学と政策手段論 (諸富) : 教科書A
9. 環境政策における経済的手段の理論と実際 (諸富) : 教科書A
10. 気候変動の経済学 (諸富) : 教科書B
11. エネルギーの経済学 (諸富) : 教科書C
12. 持続可能な発展 (諸富) : 教科書D

【履修要件】
 環境問題に関する基礎知識の有無は問わないが、環境問題と解決に興味・関心を有していることが望ましい。

【成績評価の方法・観点及び達成度】
 レポート試験及び期末試験を行う。評価の割合は、伊藤特別教授のレポート試験4、諸富教授の報告2、討論への参加2、東條准教授のレポート試験2とする。

【教科書】
 諸富徹・浅野耕太・森品寿『環境経済学講義』(有斐閣) ((2008年6月)、第1部&第2部)
 諸富徹・浅岡美恵『低炭素経済への道』(岩波新書) ((2010年4月))
 諸富徹編『電力システム改革と再生可能エネルギー』(日本評論社) ((2015年9月))
 諸富徹『環境』(岩波書店) ((2003年10月))

----- 環境経済分析 A(2)へ続く ↓ ↓ ↓ -----

環境経済分析 A (2)

[参考書等]

(参考書)
授業中に紹介する

[授業外学習 (予習・復習) 等]

授業の中で、次回の授業前に予習しておくべき文献を指示する。なお、8～12では、受講生が分担して、指定教科書の内容要約と報告の準備を行うことが求められる。

(その他 (オフィスアワー等))

研究室に来られる際には、電子メールで事前にご連絡下さい (東條: tojo@kier.kyoto-u.ac.jp)。

オフィスアワーは授業終了後、事前にメールで連絡することが望ましい (諸富: morotomi@econ.kyoto-u.ac.jp)。

※オフィスアワー実施の有無は、KULASISで確認してください。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	環境経済分析 B (演習) Environmental Economic Analysis B (Seminar)			担当者所属・ 職名・氏名	地球環境学会 教授 諸富 徹						
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水1,2 隔週開講	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
<p>This course aims to obtain profound knowledge on environmental economics, especially on economic instruments of environmental policies like environmental taxes, emissions trading systems (ETS), and subsidies. Through this course, we deal with the theory and practice of emissions trading systems. Participants are required to commit actively to this course; you are asked to read related papers, report on them, and discuss around them with other participants.</p> <p>本講義は環境経済学、とりわけ環境政策の経済的手段(環境税、排出量取引制度、補助金など)に関するより深い知識の獲得を目的とする。本年度は、これらの政策手段の中で排出量取引制度を取り上げることしたい。本講義への参加者は、積極的に講義に貢献することが求められる。具体的にはテキストを輪読し、その内容について発表し、参加者と議論することが求められる。</p>											
[到達目標]											
<p>First, it is important to know the various arguments for and against emissions trading systems, and to overview the frontier of the academic debates around ETS. Second, this course promotes all the participants to formulate their own opinions based on the solid arguments and evidences, as well as to express and discuss them logically. Third, this course aims to develop participants' basic ability to research on ETS.</p> <p>第1に、排出量取引制度をめぐるさまざまな論点を知り、それをめぐるアカデミックな論争の最前線を把握することが重要である。第2に、それらの論点に対して、参加者は自分自身の意見を形成し、それを論理的に表現し、議論できる力を形成することを目標とする。第3に、本講義を通じて排出量取引制度に関する研究を行うための基礎的力量の形成を行う。</p>											
[授業計画と内容]											
Description											
<p>The first two classes give you an overview of theory and practice of ETS. Then, the rest of the course deals with case studies of the existing ETS of the US and EU. Participants can learn how these practices divert from the theory, but on the other hand, what a kind of policy lessons and feedback for the theory can be drawn from them.</p> <p>本講義の最初の2回では、排出量取引制度の基礎と実際に関する概観を与えることにする。その後は、下記に示されているように、排出量取引制度の様々な実例を取り上げることで、その理論と実際がどのように異なっているのか、実際から理論に対してどのような含意がもたらされるのかを学ぶことにする。</p>											
Contents											
<ol style="list-style-type: none"> 1. Theoretical foundations of emissions trading systems 排出量取引制度の理論的基礎 2. Overview of emissions trading systems in the world 世界の排出量取引制度の概観 3. Case studies of emissions trading systems ① : EU ETS (1) 排出量取引制度の実際① : 欧州排出量取引制度(1) 4. Case studies of emissions trading systems ② : EU ETS (2) 排出量取引制度の実際② : 欧州排出量取引制度(2) 5. Case studies of emissions trading systems ③ : California Cap-and-Trade Program (1) 排出量取引制度 											
環境経済分析 B (演習) (2)へ続く↓↓↓											

環境経済分析B (演習) (2)

の実際③：カリフォルニア州排出量取引制度(1)

6. Case studies of emissions trading systems ④：California Cap-and-Trade Program (2) 排出量取引制度の実際③：カリフォルニア州排出量取引制度(2)

7. Case studies of emissions trading systems ⑤：Regional Greenhouse Gas Initiative (RGGI) of the US north eastern states 排出量取引制度の実際④：アメリカ東部州RGGI

[履修要件]

You are recommended to take “Global Environmental Policy and Economics” .
「地球環境政策・経済論」を履修することが望ましい。

[成績評価の方法・観点及び達成度]

Evaluation is made on the basis of the report on the related papers assigned to you in the class and the discussions based on your report. But active contributions to other participants' reports in the class will be also taken into consideration.

成績評価は、授業における関連文献についての報告と、それに関する授業におけるディスカッションに基づいて行われる。しかし、他の参加者の報告に対する参加者の議論片貢献度についても併せて考慮することになる。

授業外学習（予習・復習）等

Reading assignments are given so that students can prepare for lectures. You are requested to formulate your own opinions before the class and express them in the class so that you can contribute to class discussion.

日本語または英語の教科書を授業外に熟読することが求められる。毎回の授業前に当該テキストに関する自分の意見を形成し、それを授業で表明することで教室での議論に貢献することが求められる。

[教科書]

Information on the related papers that are assigned to you will be provided in the first class of this course.

授業で割り当てられる関連論文に関する情報は、本講義の初回に与えられる。

[参考書等]

(参考書)

Tietenberg, T.H. 『Emissions Trading: Principles and Practice, 2nd Edition』 (Routledge) ISBN:ISBN-10: 1933115319, ISBN-13: 978-1933115313 ((2006))

諸富徹・浅野耕太・森晶寿 『環境経済学講義』 (有斐閣) ISBN:ISBN-10: 4641183651, ISBN-13: 978-4641183650 ((2008))

環境経済分析B (演習) (3)へ続く↓↓↓

環境経済分析B (演習) (3)

[授業外学習 (予習・復習) 等]

None

特になし。

(その他 (オフィスアワー等))

Office hours will be immediately after each class. Other than that, you are required to make an appointment through email in advance.

オフィス・アワーは毎回の授業直後。それ以外については、あらかじめメールで面会予約をとること。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	組織情報通信システム B Information & Communication Systems in Organizations B				担当者所属・ 職名・氏名	経営管理大学院 教授 松井 啓之					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
<p>ビジネスモデルとは、企業が事業を維持・継続し、あるいは拡大・発展させるために行っている業務のやり方や取引先との関係、収益などの“構造”を、特定の視点と形式で表現したものである。モデルを作ること（モデリング）のメリットは、現状を分析して問題の理解、解決策の評価を一般的な枠組みで行うことが可能となる。本講義では現実のビジネスあるいはビジネスの具体的な流れであるビジネスプロセスをモデル化するための理論や方法を紹介した上で、自らがビジネスモデルを構築し、そのモデルをビジネスゲームとして実装し、実施することで、ビジネスモデルを分析・評価するという方法論の習得を目指す。</p>											
【到達目標】											
<p>ビジネスモデリングを理解し、実際にビジネスモデルをビジネスゲームとして実装することで、その分析・評価を行えるようにする。</p>											
【授業計画と内容】											
<p>組織情報通信システムBで取り上げるトピックスは、以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1．ビジネスモデリングとビジネスゲーム 2．ビジネスゲームの基礎 3．ビジネスモデリング基礎 4．ビジネスモデリング応用 5～8．ビジネスモデルの構築 9．中間発表（ビジネスモデル） 10～14．ビジネスゲームの開発・実装 15．最終発表・プレゼンテーション（ビジネスゲーム） <p>なお、ビジネスゲームの開発は、横浜国立大学で開発されているビジネスゲーム開発環境YBG（Yokohama Business Game）を利用し、各自が考えたビジネスモデルをネットワークに対応したビジネスゲームとして実装し、実際にビジネスゲームを実施・体験することで、ビジネスモデルの評価・分析を行う。</p> <p>横浜国立大学ビジネスゲーム http://ybg.ac.jp/</p>											
【履修要件】											
<p>インターネット経由でコンピュータを利用したビジネスゲームの開発を行うので、インターネットへアクセス可能なPCを用意すること。</p>											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
<p>講義での質疑応答への参加（20%）＋中間レポート（40%）＋最終レポート（40%） 中間レポートは構築したビジネスモデル、最終レポートは、ビジネスゲームおよびゲームの実施内容の分析</p>											
----- 組織情報通信システム B(2)へ続く -----											

組織情報通信システム B (2)

[教科書]

基本的に、講義資料および関連資料はWebページで公開もしくは講義中に配布する。

[参考書等]

(参考書)

白井宏明, 『ビジネスモデル創造手法 - 夢を現実に変える 4 ステップ・アプローチ』, 日科技連出版社, 2001

戸田保一, 飯島淳一, 『ビジネスプロセスモデリング』, 日科技連出版社, 2000

小林隆, 『ビジネスプロセスのモデリングと設計』, コロナ社, 2005

横浜国立大学ビジネスゲーム

[授業外学習 (予習・復習) 等]

インターネットアクセスが可能な環境であれば、YBGを用いたビジネスゲームの実装は可能であり、講義では質疑応答を中心とし、ビジネスゲームの実装作業は授業外に実施することになる。

(その他 (オフィスアワー等))

随時。基本的に電子メール (hmtatsui@econ.kyoto-u.ac.jp) でアポを取ってください。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

授業科目名 <英訳>	情報処理論 B (演習) Theory of Information Processing B (Seminar)				担当者所属・ 職名・氏名	経営管理大学院 教授 松井 啓之					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水1	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
【授業の概要・目的】											
社会システムや経済システムを分析するための方法論であるデータ分析およびシミュレーションについて解説し、汎用的なデータ処理言語であるR言語を利用し、実際にモデルを作成、データ分析する演習を行うことで、データ分析およびシミュレーションを用いた社会システムへのアプローチ手法の習得を目指す。											
【到達目標】											
データ分析およびシミュレーションの基礎的な知識を習得し、実際に構築したモデルをR言語を用いた実装ができるようにすること。											
【授業計画と内容】											
(授業計画と内容)											
情報処理論Bでは、前半では基本的に配布資料に沿ってR言語について基礎からはじめ、具体的なデータ分析およびシミュレーションの代表的な手法（層別分析、分類木・回帰木、モンテカルロ法）までを解説する。さらに後半では、実社会における問題をピックアップし、それらについてデータ分析あるいはシミュレーション手法を用いた、R言語を利用した解析手法の習得を目指す。なお、取り上げるトピックスは、以下の通りである。											
<ol style="list-style-type: none"> 1．Rの概要と基本操作 2．Rによるグラフ作成 3．Rによるプログラミング 4．データハンドリング 5．Rによるデータ解析の基礎 6．Rによるシミュレーションの基礎 7．中間発表（各自テーマの発表） 8～14.データマイニングおよびシミュレーションの応用 15．最終発表（シミュレーション） 											
<p>なお、本演習では、データ解析やシミュレーションの手法については、代表的かつ基本的なものしか取り上げない。各自が考える実問題をモデル化して実装することを重視する。特に、データ分析の様々な手法や理論について学びたい・興味がある場合には、「統計的情報分析1・2」を受講すること。</p> <p>Rに関する総合情報（RjpWiki） http://www.okada.jp.org/RWiki/</p>											
【履修要件】											
コンピュータを利用した演習を行なうので、表計算ソフトの操作能力程度の基本的なコンピュータリテラシーは必要である。また、統計学および出来ればプログラミングに関する基礎的な知識を有していることが望ましい。											
【成績評価の方法・観点及び達成度】											
講義・演習への参加（20%）+ 中間レポート（40%）+ 最終レポート（40%） 中間レポートはデータ解析もしくはシミュレーション分析の企画、最終レポートは、データ解析											
----- 情報処理論 B (演習) (2)へ続く -----											

情報処理論 B (演習) (2)

結果もしくはシミュレーション実施内容の分析

[教科書]

使用しない

[参考書等]

(参考書)

(参考書等)

熊谷悦生・舟尾暢男, 『Rで学ぶデータマイニング データ解析編』 / 『Rで学ぶデータマイニング シミュレーション編』, オーム社, 2008

豊田秀樹, 『データマイニング入門』, 東京図書, 2008

福島真太郎・金明哲, 『データ分析プロセス (シリーズ Useful R 2) 』, 共立出版, 2015

金明哲, 『Rによるデータサイエンス データ解析の基礎から最新手法まで 第2版』, 森北出版, 2017

[授業外学習 (予習・復習) 等]

前半は講義時間での解説が中心となるが、中盤以降では講義時間は質疑応答を中心とし、データ分析あるいはシミュレーションモデルの実装位解析作業は授業外に実施することになる。

(その他 (オフィスアワー等))

随時。基本的に電子メール (hmtatsui@econ.kyoto-u.ac.jp) でアポを取ってください。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

未更新

授業科目名 <英訳>	非線形経済成長論 1 (演習) Nonlinear Business Cycle Theory 1 (Seminar)		担当者所属・ 職名・氏名	経済研究所 教授 矢野 誠							
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
動学的均衡モデルとその均衡経路の性質について、特にその安全性と複雑性について											
[到達目標]											
[授業計画と内容]											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 動学的最適化の基礎 2. 部門均衡モデルの構造 3. 部門均衡モデルにおける解の存在と安定性 4. 他部門均衡モデルの構造 5. 他部門均衡モデルにおける解の安定性と比較動学 6. 1部門均衡における複雑系としての均衡 — 一般論 7. 分岐 8. カオス 9. 外部性から発生する複雑性 											
[履修要件]											
基本的なミクロ経済学，マクロ経済学の知識を有していること											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
出席，報告，必要に応じて試験を行う											
[教科書]											
Kazuo Nishimura and Yano Makoto 『Macroeconomic dynamics: Stability and Complexity』											
[参考書等]											
(参考書) 特になし											
(関連URL)											
http://www.kier.kyoto-u.ac.jp/~yano/lecture-j.html (講義スケジュール)											
[授業外学習 (予習・復習) 等]											
(その他 (オフィスアワー等))											
オフィスアワー：おもに木曜日です。											
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

未更新

授業科目名 <英訳>	非線形経済成長論 2 (演習) Nonlinear Business Cycle Theory 2 (Seminar)				担当者所属・ 職名・氏名	経済研究所 教授 矢野 誠					
配当 学年	i回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
動学的均衡モデルとその均衡経路の性質について、特にその安全性と複雑性について											
[到達目標]											
[授業計画と内容]											
前期の「非線形経済成長論 1」の授業計画を踏襲する。											
[履修要件]											
基本的なミクロ経済学，マクロ経済学の知識を有していること											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
出席，報告，必要に応じて試験を行う											
[教科書]											
Kazuo Nishimura and Yano Makoto 『Macroeconomic dynamics: Stability and Complexity』											
[参考書等]											
(参考書) 特になし											
(関連URL)											
http://www.kier.kyoto-u.ac.jp/~yano/lecture-j.html (講義スケジュール)											
[授業外学習 (予習・復習) 等]											
(その他 (オフィスアワー等))											
オフィスアワー おもに木曜日											
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>		現代金融理論 2 Modern Monetary Theory 2			担当者所属・ 職名・氏名		経済学研究科 教授 島本 哲朗				
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
<p>Carl Walsh の ” Monetary Theory and Policy ” を読む。 この本は、近年のマクロ経済学における進展のうち金融（理論と政策）に関する部分を紹介したものである。具体的には、短期の経済変動を「Moneyを明示的に含む Microfoundation をつけたモデル（例えば、New IS-LM モデル）」でいかに説明するか、また、そうしたモデルからどのような政策的含意が導かれるのか、を紹介している。近年のマクロ経済学の動向を理解するため、また、現代のマクロの金融政策のあり方を正確に議論するためには必読の書と言える。 講義は、受講生がテキストの内容を正確に把握することを目標にする。ただし、学部上級レベルの経済学や数学の知識は不可欠である。</p>											
[到達目標]											
最近のマクロ経済学の分野の論文で扱われている内容が理解できるようになる。											
[授業計画と内容]											
第1週 オリエンテーション 以下は、あくまで予定であり、受講生の予備知識によっては、講義のペースを早めることも遅くすることもある。 第2・3・4週 数学準備（動学的最適化と線形近似） 第6・7・8・9週 Money-in-the-Utility Function 第10・11・12・13週 New Keynesian Monetary Economics 第14・15週 Money and the Open Economy											
[履修要件]											
上述の通り、学部上級レベルのマクロ経済学とミクロ経済学および数学を理解していること。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
講義中の発表内容による。											
[教科書]											
Walsh 『Monetary Theory and Policy 3rd ed』 (MIT Press) ISBN:978-0-262-01377-2 (図書館に所蔵)											
[参考書等]											
(参考書) 授業中に紹介する											
[授業外学習(予習・復習)等]											
予習として、あらかじめ告知したテキストの該当箇所を必ず読んでくること。(理解までは求めない。) 復習として、講義の中でスキップした計算を自分で補うこと。											
(その他(オフィスアワー等))											
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	金融とマクロ経済 Money and Income			担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 教授 島本 哲朗						
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語及び英語
[授業の概要・目的]											
<p>前期の私の講義「現代金融理論2」の続編と考えていただいてよい。 Carl Walsh の "Monetary Theory and Policy" を読む。 この本は、近年のマクロ経済学における進展のうち金融（理論と政策）に関する部分を紹介したものである。具体的には、短期の経済変動を「Moneyを明示的に含む Microfoundation をつけたモデル（例えば、New IS-LM モデル）」でいかに説明するか、また、そうしたモデルからどのような政策的含意が導かれるのか、を紹介している。近年のマクロ経済学の動向を理解するため、また、現代のマクロの金融政策のあり方を正確に議論するためには必読の書と言える。 講義は、受講生がテキストの内容を正確に把握することを目標にする。ただし、学部上級レベルの経済学や数学の知識は不可欠である。さらに、前期の「現代金融理論2」の講義に出席していること。</p>											
[到達目標]											
最近のマクロ経済学（特に、金融関係）の論文が読めるようになること。											
[授業計画と内容]											
第1週 オリエンテーション 第2・3・4・5・6 Financial Markets and Monetary Policy 第7・8・9・10・11 Monetary Policy Operating Procedures 第12・13・14・15 Discretionary Policy and Time Inconsistency											
[履修要件]											
本年度前期開講の「現代金融論2」を必ず受講していること。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
講義中の発表の内容											
[教科書]											
Walsh 『Monetary Theory and Policy (3rd ed)』 (MIT Press) ISBN:978-0-262-01377-2 (図書館に所蔵)											
[参考書等]											
(参考書) 授業中に紹介する											
[授業外学習（予習・復習）等]											
予習として、あらかじめ告知したテキストの該当箇所を必ず読んでくること。（理解までは求めない。）復習として、講義の中でスキップした計算を自分で補うこと。											
(その他（オフィスアワー等）)											
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	交通経済学 1 Transport Economics 1				担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 教授 文 世一					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
交通経済学の基礎理論と分析手法の習得											
[到達目標]											
交通経済学の専門敵文献を読み、理解するための学力を身につける											
[授業計画と内容]											
下記のトピックそれぞれについて、3-4週の授業をする予定である。 <ul style="list-style-type: none"> ・交通需要 ・交通費用 ・交通料金 ・交通投資 											
[履修要件]											
学部レベルのミクロ経済学											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
宿題および学期末のレポート											
[教科書]											
Small, Kenneth A. and Erik T. Verhoef 『The Economics of Urban Transportation』 (Routledge) ISBN: 978-0-415-28515-5											
[参考書等]											
(参考書)											
[授業外学習(予習・復習)等]											
ノートをもとに復習すること											
(その他(オフィスアワー等))											
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	交通経済学 2 Transport Economics 2				担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 教授 文 世一					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
交通政策に関する経済学の学術論文を輪読することを通じて、当該分野においてオリジナルな論文を書くための準備とする。											
[到達目標]											
交通経済学の最新の成果を把握する											
[授業計画と内容]											
以下のようなトピックに関する最新の論文について輪読する <ul style="list-style-type: none"> ・交通混雑の分析と対策 ・交通インフラストラクチャーの投資 ・交通サービスの料金政策 ・交通産業における規制のデザイン など											
[履修要件]											
前期開講の交通経済学 1 を履修していること											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
授業における報告・発言および学期末のレポート											
[教科書]											
Transportation Research, Journal of Transport Economics and Policy などから適宜選択											
[参考書等]											
(参考書)											
[授業外学習(予習・復習)等]											
輪読を行う際には発表の準備											
(その他(オフィスアワー等))											
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	マーケティング経済論 A (演習) Economic Analysis of Marketing Strategy A (Seminar)			担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 教授 宇高 淳郎						
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水5	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
企業戦略やマーケティング戦略に関する文献を読み、これらの分野で論文を作成する基礎を身に付ける。											
[到達目標]											
戦略的思考に基づいて、マーケティングを分析し、論文作成につなげることが目標である。											
[授業計画と内容]											
受講者各自の専門分野に関する文献紹介をベースに進めていく。マーケティング戦略に限らず、応用ミクロ的な分野は広く対象とする。様々な分野の文献について理解を深めることで、論文を作成する基礎を培う。											
また、経営戦略や戦略の経済学に関わる文献を輪読する形式もあり得る。											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
発表等、平常点による											
[教科書]											
授業中に指示する											
[参考書等]											
(参考書) 授業中に紹介する											
[授業外学習 (予習・復習) 等]											
復習等によって、扱った内容を毎回確実に理解することが重要である。											
(その他 (オフィスアワー等))											
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	マーケティング経済論 B (演習) Economic Analysis of Marketing Strategy B (Seminar)		担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 教授 宇高 淳郎							
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	水5	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
企業戦略やマーケティング戦略に関する文献を読み、論文を作成する力を高める。											
[到達目標]											
受講者各自が水準の高い論文を作成することを目標とする。											
[授業計画と内容]											
前期と同様、企業戦略を中心とする文献を読むことに加えて、各自が構想中の論文に関する報告も行う。それに議論やコメントを加えながら、改善点を見出し、論文の水準を高めていく。											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
発表等、平常点による											
[教科書]											
授業中に指示する											
[参考書等]											
(参考書) 授業中に紹介する											
[授業外学習 (予習・復習) 等]											
復習等によって、内容の理解を深め、常にそれを自らの論文作成につなげようとする姿勢が重要である。											
(その他 (オフィスアワー等))											
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	労働市場とマクロ経済学 Labor Market and Macroeconomics				担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 准教授 遊喜 一洋					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	月3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
マクロ経済学と関連の深い労働経済学のトピックスについて、基礎的理論の講義あるいは最近の重要文献の輪読を行う。											
[到達目標]											
講義あるいは輪読を通じてトピックスについての理解を深める。											
[授業計画と内容]											
扱う文献は以下のトピックスなどから参加者の興味にあわせて選ぶ。参加者の意向によって講義か輪読のどちらを行うかを定める。講義と輪読を組み合わせることも可能である。											
<ul style="list-style-type: none"> * 人的資本 (Human Capital) 理論 <ul style="list-style-type: none"> (i) 基本モデル (ii) Ben-Porath モデル (iii) ロイ (Roy) モデル (iv) 不完全市場における人的資本投資 * シグナリング・スクリーニング モデル * 職業選択、Job Assignment モデル * 効率賃金モデル * ジョブサーチの理論 * 近年の所得分布・賃金格差の変化 * 労働市場と景気循環 * 人的資本・所得分配と経済成長・発展 											
フィードバックの方法：提出されたレポートに対するコメント。											
[履修要件]											
ミクロ経済学と経済数学についての基礎的知識											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
期末レポートと(輪読を行う場合)輪読での発表を合わせて評価する。期末レポートは授業担当者の指定する論文に関する課題を予定している。											
[教科書]											
使用しない											
[参考書等]											
(参考書) 参考文献のリストは1回目の講義時に配布する。											
[授業外学習 (予習・復習) 等]											
輪読時には文献に目を通しておくことが必須である。											
(その他 (オフィスアワー等))											
面談は予約により随時。											
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	技術と進化の経済学（演習） Evolutionary Economics (Seminar)				担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 教授 佐々木 啓明					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
本演習では、経済成長と産業構造変化に関する最新の文献を読み、それらに対する理解を深める。											
[到達目標]											
最新の文献で使用されている手法を習得し、自身の研究に役立てることを目的とする。											
[授業計画と内容]											
さしあたり、以下の論文を輪読する予定である。											
Andersen, T. M. (2016) "Does the public sector implode from Baumol's cost disease?" Economic Inquiry 54 (2), pp. 810-818.											
[履修要件]											
経済成長と産業構造変化に関する理論および実証分析に関心があること。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
授業での報告内容と参加態度で評価する。											
[教科書]											
使用しない											
[参考書等]											
(参考書) 授業中に紹介する											
(関連URL)											
http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/~sasaki/ (教員のWebページ)											
[授業外学習（予習・復習）等]											
事前に文献を読んでくること。											
(その他（オフィスアワー等）)											
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	現代政治経済学 B (演習) Modern Political Economy B (Seminar)				担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 教授 佐々木 啓明					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
本演習では、経済成長と所得分配に関する最新の文献を読み、それらに対する理解を深める。											
[到達目標]											
最新の文献で使用されている手法を習得し、自身の研究に役立てることを目的とする。											
[授業計画と内容]											
さしあたり、以下の論文を輪読する予定											
Razmi, A. (2016) "Demand regimes and income distribution reconsidered in an open economy portfolio balance framework," <i>Journal of Post Keynesian Economics</i> 39 (4), pp. 516-538.											
[履修要件]											
経済成長と所得分配に関する理論に関心があること。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
授業での報告内容と参加態度で評価する。											
[教科書]											
使用しない											
[参考書等]											
(参考書) 授業中に紹介する											
(関連URL)											
http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/~sasaki/ (教員のWebページ)											
[授業外学習(予習・復習)等]											
事前に文献を読んでおくこと。											
(その他(オフィスアワー等))											
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	比較経済政策システムB (演習) Comparative Study of Economic Policy System B (Seminar)		担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 教授 黒澤 隆文							
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	火1,2 隔週開講	授業 形態	演習	使用 言語	英語
[授業の概要・目的]											
<p>本演習では、産業政策論・産業論の観点から、「地域の競争優位」を中心的な鍵概念として、主に日本と東アジア地域の経済政策と産業・企業の実態について、ヨーロッパ、北米、他のアジア地域や新興国との比較をも念頭において、検討を行う。経済政策と実態経済の関連に関心を持つ受講生に対し、産業史と産業政策史によるアプローチの意義を伝え、それらの方法論の習得を助け、各自の研究の一助とすることが、本演習の目的である。</p> <p>演習は輪読を基本とし、適宜、担当教員の報告を含め、個別研究発表を織り交ぜる。</p>											
[到達目標]											
[授業計画と内容]											
1. イントロダクション (演習の目的と課題) 2-7 各国の政策史に関する基本文献の輪読 8-9. 個別報告 10-14. 産業政策に関する内外基本文献の輪読 15. 総括											
[履修要件]											
履修者は、「史的分析概論」「政策論基礎」(いずれもAもしくはB)を受講しておくこと(ないしは並行して受講すること)が望まれる。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
演習への参加実績(報告内容・議論への貢献) [50%] と個別報告の水準 [50%] による。											
[教科書]											
授業中に指示する											
[参考書等]											
(参考書) 授業中に紹介する											
(関連URL)											
http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/~kurosawa/											
[授業外学習(予習・復習)等]											
(その他(オフィスアワー等))											
<p>オフィスアワーは、20分以内の相談に関しては、演習終了後とする。それ以外については、予約(メール等)にて随時行う。</p> <p>※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。</p>											

授業科目名 <英訳>	労働経済学A (演習) Labor Economics A(Seminar)				担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 准教授 山田 憲					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
労働経済学の研究で多用される政策評価法、離散選択法、分解法という実証的な方法論を概観した上で、最近の応用研究を検討する。その目的は、労働経済学の実証研究に必要な知識と技術を習得することである。											
[到達目標]											
本講義を首尾よく修了した学生は、労働経済学の研究で多用される推定方法を理解し、今後は研究課題や利用可能なデータに応じてそれらの方法の中から適切なものを選ぶことができるはずである。											
[授業計画と内容]											
政策評価法、離散選択モデル、分解法を順に取り扱う。それぞれの話題において、まず私が講義を行い、次に学生が最近の研究論文を報告する。講義で取り上げる文献は下記のとおりである。											
Blundell, R. and M. Costa Dias. (2009). Alternative approaches to evaluation in empirical microeconomics, Journal of Human Resources.											
Chetty, R. (2009). Sufficient statistics for welfare analysis: a bridge between structural and reduced-form methods, Annual Review of Economics.											
Train, K. (2009). Discrete Choice Methods with Simulation, second edition, Cambridge University Press.											
Fortin, N., T. Lemieux, and S. Firpo. (2011). Decomposition methods in economics, Handbook of Labor Economics.											
[履修要件]											
ミクロ、マクロ、計量経済学を履修済みか履修中でなければならない。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
授業参加、報告、宿題 (70%)、試験 (30%) によって評価する。											
[教科書]											
使用しない											
[参考書等]											
(参考書) 授業中に紹介する											
[授業外学習 (予習・復習) 等]											
講義の前には、講義資料に目を通す。報告の前には、論文を読んで準備する。											
(その他 (オフィスアワー等))											
講義に関する質問や意見等は、講義中だけではなく講義後にも受け付ける。											
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	労働経済学B (演習) Labor Economics B (Seminar)				担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 准教授 山田 憲					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時間	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
労働経済学の主要な研究課題である労働供給、人的資本、格差に関する研究を概観した上で、最近の応用研究を検討する。その目的は、これらの分野で実証研究を行うのに必要な知識と技術を深めることである。											
[到達目標]											
本講義を首尾よく修了した学生は、労働供給、人的資本、格差に関わる理論、応用、経験的な事実を理解し、今後の研究に役立てることができるはずである。											
[授業計画と内容]											
人的資本、労働供給、格差を順に取り扱う。それぞれの話題において、まず私が講義を行い、次に学生が最近の研究論文を報告する。講義で取り上げる文献は下記のとおりである。											
Card, D. (2001): Estimating the return to schooling: progress on some persistent econometric problems, <i>Econometrica</i> .											
Rosenzweig, M. R. and K. I. Wolpin. (2000): Natural "natural experiments" in economics, <i>Journal of Economic Literature</i> .											
Keane, M. P. (2011): Labor supply and taxes: a survey, <i>Journal of Economic Literature</i> .											
Meghir, C. and S. Rivkin. (2010): Econometric methods for research in education, <i>Handbook of the Economics of Education</i> .											
Meghir, C. and L. Pistaferri. (2011): Earnings, consumption and life cycle choices, <i>Handbook of Labor Economics</i> .											
[履修要件]											
ミクロ、マクロ、計量経済学を履修済みか履修中でなければならない。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
授業参加、報告、宿題 (70%)、試験 (30%) によって評価する。											
[教科書]											
使用しない											
[参考書等]											
(参考書) 授業中に紹介する											
[授業外学習 (予習・復習) 等]											
講義の前には、講義資料に目を通す。報告の前には、論文を読んで準備する。											
(その他 (オフィスアワー等))											
講義に関する質問や意見等は、講義中だけではなく講義後にも受け付ける。											
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	国際貿易論B International Trade Theory B				担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 教授 神事 直人					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
<p>本科目では国際貿易論における最近の研究について、最新の論文の解説を行う。本科目を通じて、最近の国際貿易論の研究に関する理解を深めるとともに、当該分野で論文を書く基礎力を養うことを目的とする。</p>											
[到達目標]											
<p>本科目で取り上げる最新の研究論文を理解し、受講者自身が最新の研究テーマに関連した理論分析または実証分析を行うことができる能力を習得することを目標とする。</p>											
[授業計画と内容]											
<p>毎回の授業で基本的に最新の研究論文1本を取り上げて解説を行い、受講者全員で内容に関する討論を行う。また、受講者による発表も求められる。</p>											
[履修要件]											
<p>学部レベルのミクロ経済学とマクロ経済学に関する知識が必要である。また、学部レベルの国際経済学に関しても知識があることが望ましい。</p>											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
<p>平常点と授業中の報告、及びレポートにより評価する予定である。</p>											
[教科書]											
<p>使用しない</p>											
[参考書等]											
<p>(参考書) 授業の中でリーディングリストを配布する。</p>											
[授業外学習(予習・復習)等]											
<p>毎回の授業で取り上げる論文について、事前に熟読すること。</p>											
(その他(オフィスアワー等))											
<p>オフィスアワーの曜日・時間は最初の授業でアナウンスする。</p>											
<p>※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。</p>											

授業科目名 <英訳>		現代日本産業論 A (演習) Current Japanese Industry A (Seminar)			担当者所属・ 職名・氏名		経済学研究科 教授 塩地 洋				
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金4,5 隔週開講	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
現代日本産業において生産管理は重要な位置を占めている。授業では、「テイラー主義・フォードシステム・トヨタ生産方式の歴史的位相の比較研究」という全体テーマに基づいて、関連文献を系統的に検討していく。											
[到達目標]											
自動車産業を独自の視点で分析できるようにさせる。											
[授業計画と内容]											
以下の課題について、1 課題あたり 1～2 回程度の討論を行う。											
<ol style="list-style-type: none"> 1. クラフツマン支配との対決＝テイラー主義の生成とその普及 2. テイラー主義, アメリカンシステムからフォードシステム＝移動組立ラインへの展開 3. H.フォードによる純粋フォードシステム＝リーン・リジッド＝大量生産体制の確立 4. GMのフルライン生産とフォードシステム——その共通基盤と変容点 5. リーン・リジッドからバッファー・リジッド＝近年フォードシステムへの変転 											
[履修要件]											
特別な予備知識は必要ないが、自動車産業史に関する文献を事前に読んでくることが望まれる											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
授業時における討論での貢献度および研究報告の内容											
[教科書]											
授業中に指示する 授業中に指示する 塩地洋『自動車流通の国際比較——フランチャイズ・システムの再革新をめざして——』有斐閣、2002年、他											
[参考書等]											
(参考書) 授業中に紹介する											
[授業外学習 (予習・復習) 等]											
とくになし。											
(その他 (オフィスアワー等))											
火曜午後 4 時, メール(shioji@econ.kyoto-u.ac.jp)に事前連絡することが望ましい											
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>		現代日本産業論 B (演習) Current Japanese Industry B (Seminar)			担当者所属・ 職名・氏名		経済学研究科 教授 塩地 洋				
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	金4,5 隔週開講	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
現代日本産業において生産管理は重要な位置を占めている。授業では、「テイラー主義・フォードシステム・トヨタ生産方式の歴史的位相の比較研究」という全体テーマに基づいて、関連文献を系統的に検討していく。											
[到達目標]											
自動車産業を独自の視点で分析できるようにさせる。											
[授業計画と内容]											
以下の課題について、1課題あたり1～2回程度の討論を行う。											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 英国におけるクラフツマンシップとフォードシステムの融合と乖離 2. トヨタにおける号口管理から後工程引取システムへの転換——連続性と非連続性 3. ロッキードにおけるスーパーマーケット方式からトヨタ・かんぱん方式への発展 4. フォードシステムのモディフィケーション的導入とトヨタ生産方式の形成過程 5. ビッグスリーにおけるトヨタ生産方式の導入＝ジャパナイゼーションの受容と非受容 											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
授業時における討論での貢献度および研究報告の内容											
[教科書]											
授業中に指示する											
[参考書等]											
(参考書) 授業中に紹介する											
[授業外学習 (予習・復習) 等]											
とくになし。											
(その他 (オフィスアワー等))											
火曜午後4時,メール(shioji@econ.kyoto-u.acjp)に事前連絡することが望ましい											
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	アジア経済の実証研究 Empirical analysis on Asian economy			担当者所属・ 職名・氏名	東南アジア地域研究研究所 教授 三重野 文晴						
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	水2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
東南アジア経済に関する研究を進めるにあたって、実証・理論の両面における経済学の方法論をどのように応用できるかを講義し、考える。そのための基本となる知識や方法論を紹介し、また分野の広がり理解できるような研究展望を提供する。統計パッケージによる計量経済学的な実証分析のトレーニングも行う。											
[到達目標]											
受講者が東南アジア研究に関するそれぞれのテーマの研究に取り組む際に、経済学的な観点と方法論を主体的に加味して考察が進められるような基本知識の習得を目的とする。計量経済学的な統計分析のノウハウの習得も目的とする。											
[授業計画と内容]											
4種類の講義が用意される。どれを行うかは受講者との相談による。											
1. 講師の専門分野である開発金融論に関わる2つのトピックのいずれかを受講者の意向を踏まえて選び講義する。(1. 金融機関の行動と金融包摂、2. 企業金融と企業統治)											
2. 講師の専門地域であるタイないしミャンマー経済の概説と研究課題について講義する。											
3. 計量経済学的な実証分析の基礎を講義し、あわせて統計パッケージソフトの利用法を指南する。											
4. 講師の専門以外の経済分野について論文ないしテキストの輪読と討論を行う。											
1, 3, 4についても東南アジアを中心とする新興国についての研究が主な題材となる。受講者になるべく多くの研究と方法論に触れることができるように努めたい。											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
授業への出欠、指定論文討議における貢献およびタームペーパー											
[教科書]											
全体としては特になし。Reading Assignmentをトピックごと課す。											
[参考書等]											
(参考書)											
講義においてトピックごとに示す。											
[授業外学習(予習・復習)等]											
指定された論文を事前に読み込んでくることが求められる。論文がトピックごとに適宜指示する。											
(その他(オフィスアワー等))											
講義内で適宜指示します。											
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	日本経済史 B (演習) Japanese Economic History (Seminar)		担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 教授 渡辺 純子							
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	火3,4 隔週開講	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
戦前・戦後の日本経済史に関する文献購読を行う。リーディング・リストは、初回参加者の関心や専門、希望を考慮して決定するが、単行本であれば数冊分の分量に相当するよう、できるだけ多くの文献を読む。最新の研究(新刊書)のほか、当該分野の代表的な著作物をカバーする。											
[到達目標]											
日本経済史の専門書(先行研究)を批判的に読みこなす読解・分析能力、それらをレジュメにまとめ発表する能力、建設的な議論を構築・展開する能力を養うことによって、自らの学会発表や論文執筆を行うための基礎学力を身に着ける。											
[授業計画と内容]											
<ul style="list-style-type: none"> ・初回に文献リストを提示し、受講者の問題関心や希望、人数に応じて文献購読スケジュールを決定する。 ・毎回、担当者が内容や論点をレジュメにまとめて発表し、参加者で議論する。漫然とレジュメを作成、発表、議論するのではなく、それらについては互いに厳しくチェックし、不十分な点を明らかにし、以後の向上を目指す。 ・小レポートを課し、授業期間内に提出を求める。各自のレポートの書き方の不十分な点を皆で点検・議論し、以後の改善につなげる。 											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
出席、発表、発言・議論への参加、レポートにより総合的に評価する。											
[教科書]											
授業中に指示する											
[参考書等]											
(参考書) 授業中に紹介する											
[授業外学習(予習・復習)等]											
近年、大学院生の読書量は激減しており、問題関心も浅く狭いものにとどまる傾向にある。また、院生同士の議論や他大学院生との他流試合の機会も少ないため、自分の実力を思い知り、自分らの知的能力を鍛えていこうと思う機会さえ乏しい。											
授業を一つの手がかりとして、日常的に様々な文献を読み、問題関心や取り組むべき課題を整理し、議論し、研究につなげていく研究手法を身に着けることを期待する。											
(その他(オフィスアワー等))											
オフィス・アワー：事前にアポイントメントをとって下さい。											
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	日本経営史 Japanese Business History		担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 准教授 田中 彰							
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金3,4 隔週開講	授業 形態		使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
この講義は、経営史（または歴史性を重視した経営学・経済学）的研究を志す大学院初年次学生を主たる対象とし、この分野の標準的な知見を「組織（生産システム・企業システム）の発展および多様化」というコンセプトのもとに再構成して学習する。日本の位置づけおよびその段階的発展の理解に資するよう、必要に応じて欧米・アジアとの比較をおこなう。											
[到達目標]											
修士論文作成のさいに、自分自身の研究対象（時期、国・地域、産業・企業）を選ぶ意義について、経営史分野の研究史をふまえて適切に説明できるようになることを目標とする。											
[授業計画と内容]											
<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション／前近代の生産システム 2. 19世紀生産システム：工場制と労働者 3. 20世紀生産システム：フォードシステム／内部労働市場 4. 20世紀企業システム：垂直統合／多角化 5. 分散型生産システム：問屋制／下請制とサプライヤーシステム 6. 21世紀システムへの展望 <p>※2017年2月時点の計画であり、変更することがあります。</p>											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
<ol style="list-style-type: none"> 1. 平常の出席・発言1/3（発言の頻度、「授業の概要・目的」に照らした貢献度） 2. 発表1/3（文献要約の簡潔さ・的確さ。論点提起の具体性・発展性・考察の深さ） 3. 期末レポート1/3（アカデミックライティングの標準ルールに従っていること。自身の専門研究の見地からテキストの意義および限界、発展・応用についての見解が整然と整理されていること） 											
[教科書]											
使用しない											
[参考書等]											
<p>（参考書）</p> <p>岡崎哲二『コア・テキスト経済史 増補版』（新世社、2016年）ISBN:978-4-88-384245-2</p> <p>中瀬哲史『エッセンシャル経営史——生産システムの歴史的分析』（中央経済社、2016年）ISBN:978-4-502-19951-6</p>											
[授業外学習（予習・復習）等]											
参考書等の予習・復習をすることが望ましい。											
（その他（オフィスアワー等））											
授業を欠席する場合は事前に連絡することを期待します。											
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	管理会計論 B (演習) Management Accounting B (Seminar)				担当者所属・ 職名・氏名	経営管理大学院 教授 澤邊 紀生					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	金3,4 隔週講義	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
今年度の管理会計論Bでは、管理会計の理論・方法論に関する近年の議論を、学術専門誌に掲載された論文を中心に輪読することで、管理会計理論の進展についての理解を深めることを目指す。											
[到達目標]											
管理会計の理論・方法論に関する近年の議論を、学術専門誌に掲載された論文を中心に輪読し、管理会計理論の近年の進展について理解する。											
[授業計画と内容]											
輪読対象の論文をAOS, AAAJ, CPA, JMAR, MAR, EAR等から選択することとする。輪読論文は、第一回目で受講者と共同で決定する。下記はその例である。											
Lukka & Vinnari (2014) "Domain theory and method theory in management accounting," AAAJ 27(2): 1308-1338.											
Micheli & Mari (2014) "The theory and practice of performance measurement" MAR 25:147-156.											
Malmi & Granlund (2009) "In search of management accounting theory" EAR 18(3): 597-620.											
Corley & Gioia (2011) "Building theory about theory building: what constitutes a theoretic contribution?" AMR 36(1): 12-32/											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
平常点評価											
[教科書]											
授業中に指示する											
[参考書等]											
(参考書) 授業中に紹介する											
[授業外学習 (予習・復習) 等]											
1. 輪読・報告準備は必須である。 2. 経済学研究科の公認セミナーである会計学セミナーに参加することを強く推薦する。											
(その他 (オフィスアワー等))											
オフィスアワーについては、要望に応じてアポイントに応じる。その場合、2週間前までにメールにてアポイントをとること。											
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	統計的情報分析1 Statistical information analysis 1				担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 講師 秋田 祐哉					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 前期	曜時限	月2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
種々のデータを整理・分析して、意味や価値のある情報を抽出して活用することは、高度に情報化された社会では重要な技術である。データは年々大規模となっており、これらの処理を適切な手法を用いて効率的・効果的に行うことが求められている。本講義では、情報科学の観点から、データを分析・分類あるいは予測するための様々な統計的手法について学習する。											
[到達目標]											
<ul style="list-style-type: none"> ・データ分析（マイニングなど）の目的を理解する ・それぞれの分析手法の理論的背景と特徴・利点・制約を理解する 											
[授業計画と内容]											
以下のテーマについて各2～3回の講義を行う。 各テーマの順序・回数は進行の状況により適宜変更する。											
<ol style="list-style-type: none"> 1. データ分析の基礎（データの表現，前処理，データベース等） 2. パターン認識の基礎 3. クラスタリング 4. 機械学習 5. ニューラルネットワーク 6. テキスト処理（自然言語処理） 											
[履修要件]											
大学課程の数学（特に微分・積分，確率・統計）を学習していること。情報科学・工学の知識は必ずしも必要ではないが、コンピューターの知識はあることが望ましい。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
期末レポート（1回）により評価する。											
[教科書]											
使用しない											
[参考書等]											
（参考書） 授業中に紹介する											
[授業外学習（予習・復習）等]											
各回とも、それまでの講義内容を理解していることが前提となるので、十分に復習をしておくこと。											
[その他（オフィスアワー等）]											
講義資料の配付や諸連絡には学習支援システム（Panda）を使用する。											
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	統計的情報分析2 Statistical information analysis 2				担当者所属・ 職名・氏名	経済学研究科 講師 秋田 祐哉					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	月2	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
[授業の概要・目的]											
種々のデータを整理・分析して、意味や価値のある情報を抽出して活用することは、高度に情報化された社会では重要な技術である。データは年々大規模となっており、これらの処理を適切な手法を用いて効率的・効果的に行うことが求められている。本演習では、統計的情報分析1で学習した様々な統計的分析手法について、複数のソフトウェアを用いて実践する。											
[到達目標]											
<ul style="list-style-type: none"> ・大規模なデータの取り扱い方法について習得する ・それぞれの分析手法を実際のデータに適用できるようになる 											
[授業計画と内容]											
以下のテーマについて、R・Weka・Pythonを用いて、各1～3回の演習を行う。 各テーマの順序・回数は進行の状況により適宜変更する。											
<ol style="list-style-type: none"> 1. データの基本的な処理・操作方法 2. 基本的な分析（主成分分析・因子分析・線形判別分析など） 3. クラスタリング 4. 機械学習 5. ニューラルネットワーク 6. テキスト処理（自然言語処理） 7. 分析結果の表現手法 											
[履修要件]											
統計的情報分析1を履修していること。コンピューターの基本操作について十分な知識と技術があること。											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
期末レポート（1回）により評価する。3分の1以上欠席した場合は単位を認めない。											
[教科書]											
使用しない											
[参考書等]											
（参考書） 授業中に紹介する											
[授業外学習（予習・復習）等]											
各回とも、それまでの内容を理解していることが前提となるので、十分に復習をしておくこと。											
（その他（オフィスアワー等））											
原則として演習室の端末で実施できるように演習を構成しているが、自分のノートパソコンを持参して使用してもよい。 講義資料の配付や諸連絡には学習支援システム（PandA）を使用する。											
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

授業科目名 <英訳>	Corporate Strategy and Organization Corporate Strategy and Organization				担当者所属・ 職名・氏名	経営管理大学院 准教授 COLPAN, Meziyet Asli					
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2017・ 後期	曜時限	木3	授業 形態	演習	使用 言語	英語
[授業の概要・目的]											
The objective of this course is to examine the major theoretical approaches to the fields of corporate strategy and organization. The course is especially concerned with how multi-business companies have developed over time in different nations. The course also examines how those companies create value across diverse businesses and design their organizational structures. The format of the course will be that of a research seminar, which involves presentations and discussion. It shall appeal to those students who are interested in understanding diversified companies.											
[到達目標]											
The ultimate goal is to make students understand the diverse development of corporate strategies and structures, as well as the internal functioning of those enterprises, in different nations.											
[授業計画と内容]											
This course will examine the development and functioning of multi-business enterprise in different nations. Modules and topics covered in the course include the below six issues: Part 1. Development of big business: The long-term evolution of the multi-business enterprise Part 2. Varieties of capitalism and institutional context Part 3. Enterprise models: Multidivisional enterprise vs business groups Part 4. Resources, capabilities and corporate strategies Part 5. Organization and the role of headquarters in multi-business companies Part 6. Ownership, governance and their effects on organizational models											
[履修要件]											
Interest on corporate strategy and structure, corporate governance as well as business history.											
[成績評価の方法・観点及び達成度]											
Active class participation (30%), presentations (30%), final exam (40%).											
[教科書]											
No specific textbooks are used. Relevant materials will be distributed in class each week.											
[参考書等]											
(参考書)											
[授業外学習 (予習・復習) 等]											
Students will need to come prepared to class by reading given assignments. They are also expected to make presentations during the semester.											
(その他 (オフィスアワー等))											
After class and by appointment via email (colpan.asli.2e@kyoto-u.ac.jp)											
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											